

平成 24 年 2 月 13 日

小学校低学年における説明的文章教材 の日中比較

教科教育専攻 国語教育専修

蘇 麗

目次：

| | |
|---|----|
| 研究の動機 | 1 |
| 序章 研究の目的と方法 | 2 |
| 第1節 研究の目的 | 3 |
| 第2節 研究の方法 | 3 |
| 第1章 小学校における説明的文章指導の目的 | 5 |
| 第1節 日本における説明的文章指導の目的 | 6 |
| 第1項 説明的文章指導の目的に関する先行研究の指摘 | 6 |
| 第2項 「学習指導要領」における説明的文章指導の目的 | 9 |
| 第3項 教科書会社の解説から見た説明的文章指導の目的 | 11 |
| 第2節 中国における説明的文章指導の目的 | 13 |
| 第1項 「課程標準」（「全日制義務教育語文課程標準」）における 説明的文章指導の目的 | 13 |
| 第2項 教科書教材から見た説明的文章指導の目的 | 17 |
| 第3節 説明的文章指導の目的における日中の共通点と相違点 | 20 |
| 第1項 説明的文章指導の目的について | 20 |
| 第2項 小学校低学年の位置づけについて | 20 |
| 第2章 小学校の国語教科書における説明的文章教材の内容と構成 | 22 |
| 第1節 日本の説明的文章教材の構成 | 23 |
| 第2節 中国の説明的文章教材の構成 | 25 |
| 第3節 説明的文章教材の内容と構成における日中の共通点と相違点 | 33 |
| 第1項 説明的文章教材の系統性について | 33 |
| 第2項 説明的文章教材の系統性における低学年の位置づけについて | 35 |
| 第3章 小学校低学年における日中の説明的文章教材 | 36 |
| 第1節 1年生教材「くちばし」と「比尾巴」の共通点及び相違点 | 37 |
| 第1項 教材について | 37 |
| 第2項 教師用指導書における教材の扱われ方について | 40 |
| 第2節 2年生教材「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」の 共通点及び相違点 | 46 |
| 第1項 教材について | 46 |
| 第2項 教師用指導書における教材の扱われ方について | 49 |
| 結章 研究の成果と今後の課題 | 56 |

| | |
|------------------------|----|
| 第1節 研究の成果 | 57 |
| 第2節 今後の課題 | 58 |
| 引用文献・参考文献 | 59 |
| 資料 | 61 |
| ・教材「くちばし」／「比尾巴」 | |
| ・教材「たんぽぽのちえ」／「植物妈妈有办法」 | |

研究の動機

日本に来て様々な日本人と接するとき、一番気になったのは、日本人と中国人の物事に対する考え方の違いであった。はじめは、文化が違うから考え方も違うのだろうと考えて、それは当然なことだと思っていた。しかしそのうちに、文化の違いがどこから生まれたのだろうかと疑問を持つようになった。この疑問に対して、私は、受けている教育の違いが影響しているのではないかと考えた。特に、子どもが在籍する期間の長い小学校の教育は、大きく作用しているのではないだろうか。

日本と中国における小学校の国語科教育は、一体どこが違うのか。その問いを持ちながら、日本の小学校の教科書を読んでみた。私は、日本では5つの教科書会社から教科書が発行されていることと、それぞれの教科書に載っている教材数の少なさに驚いた。中国では、教科書といえば、人民教育出版社のものである。近年、人民教育出版社以外に、いろいろな地方の出版社から教科書が出版されるようになった。しかし、人民教育出版社の教科書が最も多く使われていることに変わりはない。また、教材数も、中国の教科書に載っている教材の数は、日本に比べてかなり多い。日本の方は、教材数は少ないが、文章は中国の教材より長くて、ジャンルも分かれている。ここで私が気になったのは、説明的文章というジャンルのことである。

説明的文章の授業という、つまらなくて、先生は文章の形式的なことばかり強調していたように記憶している。その結果、私は説明的文章が嫌いになった。そのような授業をばかり受けていたら、子どもたちは、説明的文章が嫌いになると考えられる。教師は、子どもの興味や関心を高めることが必要であり、そのためにも、説明的文章はそもそも何を子どもたちに教えるべきものなのかという原点から考え直す必要があると思う。

日本でも中国でも、小学校の説明的文章はほとんど、具体的な物事を取り上げた説明文である。こうした説明文には、簡潔な文章に科学的な知識が豊富に詰まっている場合が多い。また、説明の仕方も科学的である。教師は、このような文章を子どもたちに読ませる機会に、たくさんの知識を与えようとするかもしれない。しかし、国語科の説明文は、理科や社会科、あるいは生活科で扱われるものではなく、あくまでも国語科の授業の教材である。国語科の授業である以上、言葉とその仕組みが学習の対象にならなければならない。すなわち、説明文的文章では、説明されている科学的な内容だけではなく、説明の仕方や、その背後にある筆者の問題意識や科学者としてのものの見方などが、言葉を通して学ばなければならないのである。特に小学校低学年の教材には、分かりやすい言葉で述べられているが、そこには価値ある表現方法も存在している。この段階での学習は、子どもたちの将来に与える影響は大きいとも考えられる。

日本と中国における説明的文章指導に関する比較研究を行い、両国の共通点や相違点を明らかにしたい。そのことは、説明的文章指導の差異（国や地域の間、あるいは個々の授業の間における差異）と普遍性を明らかにすることに結びつき、それぞれの国における母語教育の改善にもつながるのではないだろうか。このように考え、本論文の執筆に臨んだ。

序章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

日本における説明的文章指導については、植山俊宏らの研究によって、その成果がまとめられている（全国大学国語教育学会編（2002）『国語科教育学研究の成果と展望』，明治図書）。しかしながらそこには、説明的文章指導に焦点を絞り、日本と中国とを比較した先行研究が示されていない。また実際に、説明的文章指導に着目した日中比較研究を検索しても、該当するものを見つけることができない。

一方、中国においては説明的文章指導に関する研究が進んでいない。したがって、日本や他の国における説明的文章指導との比較研究も行われていない状況にある。

こうした先行研究の状況をふまえて、本論文では、日本と中国の母語教育における説明的文章指導を比較し、そこに見られる共通点と相違点を明らかにすることを研究の目的として設定する。ただし、説明的文章指導というだけでは研究の範囲が広すぎるため、この論文では、特に小学校低学年に焦点化して考察を進める。小学校低学年は説明的文章の学習の入門期に位置づけられることから、その重要性が認められる。説明的文章指導に関する先行研究のある日本においても、低学年に焦点を絞った著書が発行されている（河野順子・国語教育湧水の会著（2008）『入門期の説明的文章の授業改革』，明治図書）。

第2節 研究の方法

本論文では、第1節に記した目的を達成するために、次のような観点による比較を行う。

・日本と中国において、説明的文章指導を拘束する資料を比較する。

日本における「学習指導要領」と中国における「全日制義務教育語文課程標準」（以下、本論文では「課程標準」と略記する）を取り上げて、それぞれの説明的文章指導の目的を明らかにした上で、両者を比較する。なお、先行研究のある日本については、先行研究の指摘と「学習指導要領」の記述とを関連させた考察も行って、日本における説明的文章指導の目的をより明確にする。

・日本と中国における説明的文章教材を比較する。

日中において、それぞれ最も採択されている光村図書出版と人民教育出版社の教科書を取り上げる。各教科書の内容や構成についても考察した上で、両国の教科書と教材を比較して、その共通点と相違点を明らかにする。特に低学年の教材については、光村図書出版の一年生教材「くちばし」と中国人民教育出版社の一年生教材「比尾巴」の比較、光村図書出版の二年生教材「たんぽぽのちえ」と人民教育出版社の二年生教材「植物妈妈有办法」を比較する。指導のあり方も含めて、日中両国の共通点と相違点を具体的に考察し、明らかにしたい。

上記の観点に基づき、本論文では「小学校における説明的文章指導の目的」(第1章)、「小学校の国語科教科書における説明的文章教材の内容と構成」(第2章)、「小学校低学年における日中の説明的文章教材」(第3章)の章を設けて考察を述べる。

第1章 小学校における説明的文章指導の目的

第1節 日本における説明的文章指導の目的

第1項 説明的文章指導の目的に関する先行研究の指摘

説明的文章を読み、情報を取得するのはとても大切なことである。私たちは日常生活の中で非常に多くの説明的文章と接している。例えば、病気になって、薬を飲もうとするときに説明書を読む。新しい電気製品を買って使おうとするときに説明書を読む。更に、自分が知りたいことについて、いろいろな資料を調べ集めて、読むことなどもある。そのとき私たちが読んでいるのは、ほとんどが説明的文章である。読者は説明的文章を読んで、新しい知識を得たり自分にはない物の見方や考え方を知ったりすることができる。それは、説明的文章を読むことの一番大きな役割である。

しかし、上に述べたような状況は、大人にとってよくあることであって、子どもにとっては、なかなかないことかもしれない。子どもたちは、自分で説明的文章を読まなくても、周りの大人から教えてもらえることもあるだろう。子どもたちは、大人のように、自由にかつたくさんの説明的文章を読むこともないかもしれない。しかし、子どもの時に受ける教育は、彼らの成長に大きな影響を与えると考えられる。説明的文章を扱うことによって、小学校の子どもたちにどのようなことを教えるべきだろう。情報を得るだけでよいのであれば、国語科の授業でなくでもできるはずである。だから、国語科の授業での説明的文章の学習を、単な情報の収集で終わるようなものにしてはいけない。それ以外にも大事なことがあるはずである。以上のような考察から、ここでは、説明的文章指導の目的を改めて考えみたい。

まず、説明的文章の定義を確認しておく。説明的文章の定義に関して、阿部昇（2003）では、次のようにその「細目」が挙げられている。

説明的文章のジャンルについて、今まで多くの研究者・実践家がいろいろな枠組みを示してきた。その一つ一つの細目には、例えば「報告文」「観察文」「記録文」「解説文」「感想文」「意見文」などさまざまなものがある。が、基本的には、それらは次の二つのジャンルに分けることができる。

説明的文章：説明文

論説文

（阿部昇（2003）「説明的文章」、柴田義松・鶴田清司・阿部昇『あたらしい国語科指導法』、学文社、P.54。）

更に、上記引用における「説明文」と「論説文」について、阿部（2003）は次のようにまとめている。

「説明文」は、社会のなかで真としてほぼ認められていること、あるいは研究・学問分野で定説として認められていることを、それをまだ知らない人たちに向かって解

き明かした文章である。一方「論説文」は、社会のなかでまだ見解が定まっていないこと、研究・学問分野で定説とはなっていないこと（仮説）を、多くの人たちに説得的に論証しつつ述べていった文章である。前者には、「報告文」「観察文」「記録文」等が含まれる。教科書の文章の大部分、また製品の使用マニュアルなどもこれにあたる。後者には、「意見文」「主張文」「評論文」等が含まれる。「論文」といわれるものこれに該当する。

（阿部昇（2003）「説明的文章」、柴田義松・鶴田清司・阿部昇『あたらしい国語科指導法』、学文社、P. 54。）

説明的文章については、さまざまな解説があるが、それらのうちもっとも最近にまとめられた、要を得た定義を記しているのが上に引用した阿部（2003）である。内容から見ると、日本の小学校の国語教科書に載せられている説明的文章教材は、ほとんど物事についての説明する文章、つまり説明文である。ただし、高学年になって、論説文が取り上げられているようになっている。以下に、例として光村図書の説明的文章教材を挙げる。各教材の前に示すのは、教材の冒頭に記されている子どもへの働きかけである。どのように読ませたいかという編集者の意図が表れていると考え、合わせて示す。

1年（上）

「なぞなぞあそび」

「くちばし」

みんなでよもう「みいつけた」

1年（下）

比べてよもう「じどう車くらべ」

ちがいをかんがえてよもう「どうぶつの赤ちゃん」

2年（上）

読んでわかったことをまとめよう「たんぼぼのちえ」

読んで考えたことを書こう「どうぶつ園のじゅうい」

2年（下）

読んで、せつめいのしかたを考えよう「しかけカードの作り方」

知っていることとつなげて読もう「おにごっこ」

3年（上）

読んで、かんそうをもとう「イルカのねむり方」「ありの行列」

3年（下）

せつめいのしかたを考えよう「すがたをかえる大豆」

かるたについて知ろう「かるた」

4年（上）

読んで、自分の考えをまとめよう「大きな力を出す」「動いて、考えて、また動く」

4年（下）

説明のしかたについて考えよう「アップとルーズで伝える」

科学読み物をしょうかいしよう「ウナギのなぞを追って」

5年

新聞の編集のしかたや記事の書き方に目を向けよう「新聞を読もう」

筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう「見立てる」「生き物は円柱形」

説明のしかたについて考えよう「天気を予想する」

本は友達「千年の釘にいどむ」

自分の考えを明確にしながら読もう「ゆるやかにつながるインターネット」

6年

文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう「感情」「生き物はつながりの中に」

ものの見方を広げよう『鳥獣戯画』を読む」

読んで、自分の考えをもとう「平和のとりでを築く」

言葉について考えよう「言葉は動く」

このリストからわかることは、低学年では物事について説明する「説明文」が多く、高学年になるにしたがって、筆者の見解がより色濃く表れる論説文が載っていることである。これらの説明的文章を通して、子どもたちのいかなる力を育てようとしているかを考えてみたい。

一般的に、説明的文章といえは、読者に知識や情報などを伝えることが最も重要な役割であると考えられていることだろう。読み手が大人であっても子どもであっても、そのように考えられているのではないか。しかし、繰り返し述べることになるが、国語科の授業における説明的文章指導では、情報の収集以外にも学ぶべき大事なことがある。

植山（2001）に、次のようにある。

説明文は、ある事柄を相手に的確に伝えることに主眼があるので、多義的な表現を用いないことを原則とする。また、伝えるべき事柄については、その事柄の本質に関して伝えたい視点を明確に持っていることが重要である。

説明文は相手にその内容とその記述の際の筆者の思想（価値観）を説得する役目も持つ。単に内容を理解させるだけではなく、それなりの納得を呼び起こして

こそ、その目的を果たすのである。

(植山俊宏 (2001)「説明・解説」, 大槻和夫編『国語科重要用語 300 の基礎知識』, 明治図書, p. 141.)

ここでは、「説明文は相手にその内容とその記述の際の筆者の思想(価値観)を説得する役目の持つ」と指摘されている。この指摘をふまえるならば、読み手は説明文を読むとき、内容を理解する以外に、筆者の思想(価値観)も把握すべきである。

そのほかに、櫻本明美 (2001) が、次のようなことを述べている。

子どもは、日常生活においても、またさまざまな学習場面でも、「それはそんなもの(こと)か」「どのようにするのか」「なぜなのか」「どんな役に立つのか」などの問いをもつ。その問いを追究し、みつけた答えを文章に書き表す力は、主体的な学びの支えとなるものである。また、説明文の表現学習は、より確かなコミュニケーションのための表現技能を高めていく好機ともなる。

(櫻本明美 (2001)「説明文」, 日本国語教育学会編『国語教育辞典』, 朝倉書店, P. 249.)

子どもはいろいろな物事に関心を持つ。さまざまなことの疑問を持って、答えを見つけようとする。そのために周りの大人に聞くか資料を調べるかなどの手段の違いはあるにしても、櫻本 (2001) が述べるように、単に答えを見つけて終わりではなく、見つけた答えを文章にする、つまり書くことも大切である。書く活動を通して、いつも読み手の立場に立っている子どもが、筆者の立場に立ち違う角度から考える力が育つことができると考えられる。

更に、櫻本 (2001) は「書き表す力」だけでなく「説明文の表現学習から、より確かなコミュニケーションのための表現技能を高めていく好機ともなる」と指摘している。我々の生活の中で欠かせないのは、他者を理解し、自分の考えや伝えたいことを他者に伝えることである。要するに、人とのコミュニケーションが重要なのである。自分の話したいことを相手に分かりやすく伝える能力は、国語の授業でこそ育むべきある。その能力を育てる上で、大きな働きを果たすのが説明的文章の学習であると考えられる。書く力、他者とコミュニケーションを図る力も、説明的文章指導の目的である。

先行研究における以上の指摘をふまえると、国語科において説明的文章教材を読むことについては、情報を理解するだけでなく、筆者の思想(価値観)を把握したり、(書くことも含めて)他者とコミュニケーションを図ったりする力を育むことに、その目的があるといえるだろう。

第2項 「学習指導要領」における説明的文章指導の目的

日本の「学習指導要領」では、小学校国語科の目標として、以下を明示している。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

それに基づいて、各学年の目標及び内容が、第1学年及び第2学年、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年に三段階と分かれて示されている。内容については、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の三つに分けて具体的に書かれている。ここでは、その中の説明的文章と関係する記述に着目して考察を進める。

まず、説明的文章の情報の収集に関係することとして、各学年の目標はいかなる力を求めているかについて考察したい。

各学年では、「C 読むこと」の内容において次が要求されている。

第1学年及び第2学年

イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。

第3学年及び第4学年

イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。

第5学年及び第6学年

ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。

これらはいずれも、「説明的文章の解釈に関する指導事項」である（文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版社，P.20）。文部科学省（2008）には、次のような説明が述べられている。

低学年では、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと、中学年では、目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと、高学年では、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすることを示している。

なお、文章の解釈とは、本や文章に書かれた内容を理解し意味付けることである。具体的には、今までの読書経験や体験などを踏まえ、内容や表現を、想像、分析、比較、対照、推論などによって相互に関連付けて読んでいく。文章の内容や構造を理解

したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていくことである。

(文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説 国語編』, 東洋館出版社, P. 20。)

上の引用の最初の段落は、「学習指導要領」の内容を述べたものである。これだけを見ると、「内容の大体を読む」「中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読む」「文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえる」といった、国語科の目標の言葉にある「正確に理解する能力」を育てることが目指されているように見える。しかし、その中に「目的に応じて」「自分の考えを明確にしながら読んだりする」といったことが書かれている。このことから、テキストを正確に理解するだけではなく、読み手の目的意識や価値判断が求められていることがわかる。そのことは、上の引用の第2段落でよりはっきりとわかる。「文章の内容や構造を理解したり」という言い方は、「正確に理解する」読みを想像させる。しかし、それ以外の「今までの読書経験や体験などを踏まえ、内容や表現を、想像、分析、比較、対照、推論などによって相互に関連付けて読んでいく」「その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていく」といったことは、いずれも、「正確に理解する」ことに収まらない、読者の主体的な読みを認めているといえるだろう。

「第1項 説明的文章指導の目的に関する先行研究の指摘」において、先行研究では、国語科において説明的文章教材を読むことについて、「情報を理解するだけでなく、筆者の思想(価値観)を把握したり、(書くことも含めて)他者とコミュニケーションを図ったりする力を育むこと」に、その目的があるとされていると述べた。「学習指導要領」の場合は、「正確に理解する能力」を育てるために、まずは文章を正確に理解することを大事にしている。しかしそれだけではなく、書き手の意図を推論したり自分の考えを明らかにしたりすることも求めており、内容を読むだけでなく内容と表現を関連付けることも要求している。こうした点に、説明的文章指導の目的における、先行研究と「学習指導要領」との接点があるように思われる。文部科学省(2008)の「総説」中の「1 改訂の経緯」では、OECD生徒の学習到達度調査(PISA)の結果からみた日本の児童生徒の課題が挙げられている(P. 1)。こうした結果の影響を受けながら現行の「学習指導要領」は改訂され、そこでの「C 読むこと」には、PISA等の国際的な学力調査における読解力のとらえ方が影響している。たとえば「自分の考えを明確にしながら読んだりする」といったことは、PISAにおける「テキストの熟考・評価」を反映したものであろう。そして、そうした影響を受けた結果、日本における説明的文章に関する先行研究との接点が見出されたのである。

第3項 教科書会社の解説から見た説明的文章指導の目的

「第2項 『学習指導要領』における説明的文章指導の目的」では、「学習指導要領」における説明的文章指導の目的とその内容を確認した。そのような「学習指導要領」の記述についてさらに考えるために、ここでは国語科の教科書に目を向けたい。

現在、日本では5社の教科書会社が小学校国語科教科書を出版しているが、ここでは、三重県でもっとも多く地域で採択されている、光村図書出版の教科書を例として取り上げる。

光村図書出版では、「身につけたい力」を再構成して、発達段階に応じて下のようなねらいを明確に示している。

発達段階を考慮して、思考力・感受性・想像力がバランスよく育つように組織しました。各学年で、少しずつ力が積み上がっていくよう、六年間の学習内容を構造化しました。

読む（説明文）

・体験する 楽しむ

1年 語や文のまとまりが分かり、書かれていることの大体をとらえることができる。

2年 順序に沿って読み、内容をとらえることができる。

・方法を知る 多様性を知る

3年 「段落」の働きを知り、「初め・中・終わり」の大きな構成と、段落ごとの中心を把握することができる。

4年 段落相互には、さまざまな関係があることを知り、段落の役割をとらえて、目的に応じた内容の要約ができる。

・意味づける 価値づける

5年 文章を読んで、挙げられている例や根拠から、筆者の意図をつかむことができる。

6年 筆者のものの見方と自分の考え方を比べながら読むことができる。

思考力：並べる・比べる⇒分ける・関係づける⇒統合する・条件づける
他者との関係性の中で自分を見つめる

（光村図書出版（「編集の趣旨特色」。引用は、光村図書ホームページ

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/material/23skyokasho/pdf/kokugo/editing/all.pdf>（2011年12月20日アクセス）による。）

この学習計画には、光村図書出版のねらいが表れている。この学習計画で用いられている表現は、「学習指導要領」の言葉をふまえたものであり、それをより簡潔に示したものといえるだろう。教科書は、それを作った出版社のねらいがはっきりしていて、その教科書を使う教師もまた、授業のねらいをはっきりさせるべきである。たとえば、教師が自分の教材解釈を明確にせず内容の読解ばかり重視すると、子どもはたくさんの新しい知識を得ることができるかもしれないが、それにとどまってしまう。また、教材で取り上げられている題材だけを大事にしてしまうと、教材で扱われている範囲を超えて、学習内容が国語科から離れていく恐れもある。その一方で、これまでに何度も指摘されてきたように、文章の形式ばかりに注目すると、学習がつまらなくて、説明的文章が嫌いになる子どもが増えるだろう。だから、教師は授業のねらいを明確にしなくてはならないし、その際に教科書のねらいも参考になると考えられる。上に引用したねらいは、そのような働きを持つものでなければならない。本当は「学習指導要領」の単なる言い換えであってはならないはずだが、実際は、「他者との関係の中で自分を見つめる」といった言葉はあるものの、具体的なねらいとはなっていない。このような記述では、「学習指導要領」における説明的文章指導の目的を体系的にかつ具体的に把握することはできない。つまり、教科書は「学習指導要領」における説明的文章指導の目的をふまえているが、教科書会社による解説では、その目的は教師に伝わらないと考えられる。

第2節 中国における説明的文章指導の目的

第1項 「課程標準」（「全日制義務教育語文課程標準」）における説明的文章指導の目的

中国の説明的文章の目的を明確にするために、ここではまず、中国における説明的文章の定義を確認する。中国社会科学院語言研究所による『現代漢語詞典』の「説明文」の項には、次のような説明が載っている。

説明事物的情况或道理的文章。（「物事の状況または道理を説明する文章。」）

（中国社会科学院語言研究所編（2005）『現代漢語詞典』，商務印書館，P. 1286）

簡潔なこの定義を具体的にするために言葉を補うならば、「説明的文章」とは、物事の形、構造、性質、特徴、役割などについて、客観的な立場から紹介して、読者に理解してもらうような文章を指す。また、抽象的なものとその関係、あるいは原理などを説明して、読者にそうになっている理由を理解させるものといった、さまざまな物事について述べている文章を含めて、すべて説明的文章であるといえる。当然、説明する対象と説明する目的によって、一つの文章の中で、物事の紹介と道理の陳述が交ざって一緒に使う場合もあると考えられる。

このような定義によって説明的文章をとらえるならば、中国では、日常生活の中で、説

明文と接する機会は非常に多いはずである。大人はもちろん、子どもにもたくさんあると考えられる。様々な物事に対する興味・関心を非常に強く持っている子どもにとって、説明文は、自分を未知な世界に連れて行く文章となるだろう。

続いて、中国の小学校における説明的文章指導の目的について考えてみたい。なお、中国の小学校の教科書では、低学年では、「説明文」や「説明的文章」といった名称は使われていない。5年生（厳密には、上下二冊のうち、上の教科書）から、説明文という名称が明確に記されている。しかし、低学年の教科書に載っている教材の中で、説明文と定義されていないが、説明文の働きを持つとみられる教材がある。

こうした説明的文章教材を用いて、中国では子どもたちに何を教えようとしているのか。日本には「学習指導要領」があるが、中国においてそれに対応するのが「課程標準」であり、これにしたがって授業が行われる。「課程標準」の正式名称は「全日制義務教育語文課程標準」であり、そこでは小・中学校国語科（語文）の目的として、以下が明示されている。

总目标

1. 在语文学习过程中，培养爱国主义感情、社会主义道德品质，逐步形成积极的人生态度和正确的价值观，提高文化品位和审美情趣。
2. 认识中华文化的丰厚博大，吸收民族文化智慧。关心当代文化生活，尊重多样文化，吸取人类优秀文化的营养。
3. 培植热爱祖国语言文字的情感，养成语文学习的自信心和良好习惯，掌握最基本的语文学习方法。
4. 在发展语言能力的同时，发展思维能力，激发想像力和创造潜能。逐步养成实事求是，崇尚真知的科学态度，初步掌握科学的思想方法。
5. 能主动进行探究性学习，在实践中学习、运用语文。
6. 学会汉语拼音。能说普通话。认识 3500 个左右常用汉字。能正确工整地书写汉字，并有一定的速度。
7. 具有独立阅读的能力，注重情感体验，有较丰富的积累，形成良好的语感。学会运用多种阅读方法。能初步理解、鉴赏文学作品，受到高尚情操与趣味的熏陶，发展个性，丰富自己的精神世界。能借助工具书阅读浅易文言文。九年课外阅读总量应在 400 万字以上。
8. 能具体明确、文从字顺地表述自己的意思。能根据日常生活需要，运用常见的表达方式写作。
9. 具有日常口语交际的基本能力，在各种交际活动中，学会倾听，表达与交流，初步学会文明地进行人际沟通和社会交往，发展合作精神。
10. 学会使用常用的语文工具书。初步具备搜集和处理信息的能力。

（語文課程標準研制組「語文課程標準」。引用は、人民教育出版社ホームページ

<http://www.pep.com.cn/xiaoyu/jiaoshi/tbjx/kbjd/jiedu/> (2011 年 12 月 20 日アクセス) による。)

以下に、上に引用した「総目標」の日本語訳を示す。

総目標：

1. 「語文」(国語科)を勉強するとともに、国を愛する感情、社会主義の思想を育てていく。積極的な人生観と正しい価値観を持ちつつ、文化を理解し、審美する趣向を高める。
2. 中国文化の豊かさを知り、民族の文化の知恵を吸収する。今日の文化生活に関心を持ち、多文化を尊重し、人類の優秀な文化を吸収する。
3. 母国の言語文字に対する熱愛を育て、言語学習するときの自信とよい習慣を育て、基本的な「語文」(国語科)の学習方法をマスターする。
4. 言語能力を発展させると同時に、思考力を発展させ、想像力と創造力の潜在性を激発させる。徐々に、事実を求め、真実を尊重する科学的な態度を育てていく。科学的な思考方法をはじめて身に付ける。
5. 探究的な学習を自主的にでき、実践の中で学習し、言語能力を運用する。
6. ピンインをマスターする。普通話で話せる。3500 個ぐらいの常用漢字を読める。漢字を正しくきれいに書ける。一定の書くスピードができる。
7. 独自で読書することができる能力を身に付け、感情を体験することを重視し、豊富な知識を貯め、よい語感を育てる。多様な読書方法を身に付ける。文学作品について、理解・鑑賞することができ、高貴な感情と響味の影響を受け、個性を育て、自己の精神世界を豊かにする。辞書や参考書などを使い、簡単な古文を読める。9 年間での、授業以外の読書量は 400 万字以上を求める。
8. 具体的かつ明確に、自分の意思を流暢な文章で表現できる。日常生活の要求に応じて、よく使われている表現方法で作文を書く。
9. 日常生活において音声で交流する基本的な能力を身に付ける。さまざまな交流活動の中で、傾聴、表現、交流することを身に付け、マナーを守りながら、人々と交流し付き合うことを学び、協力する心を発展させる。
10. 「語文」(国語科)の常用的な参考書の使い方を身に付ける。情報を収集し処理する能力をはじめて持つ。

中国は9年間の義務教育制をとっている。以上の引用に挙げられている総目標は、小学校6年間と中学校3年間をかけて育てたいことがらを示している。

これに基づいて、「課程標準」では、各学年の目標及び内容が、第一学段(1～2学年)、第二学段(3～4学年)、第三学段(5～6学年)、第四学段(7～9学年)の四段階に分

けて示されている。内容については、「(一)漢字の読み書き」、「(二)読む」、「(三)書く」、「(四)話す」、「(五)総合的学習」の五つに分けて、具体的に書かれている。ここでは、小学校の部分だけを取り出して、その中の説明的文章と関係する記述に着目して考察する。

まず、説明的文章に記されている情報の理解・収集に関係することとして、各学年の目標がいかなる力を求めているのかを考察する。

それぞれの学年では、「(二)読む」の内容において次の各項目が要求されている。日本語訳も合わせて示す。

第一学段（1～2 学年）

5. 结合上下文和生活实际了解课文中词句的意思，在阅读中积累词语。

(5. テキストの前後を考え、実生活と結びつけてテキストを理解しよう。読む中で、単語の量を増やしていく。)

第二学段（3～4 学年）

3. 能联系上下文，理解词句的意思，体会课文中关键词句在表情达意方面的作用。能借助字典、词典和生活积累，理解生词的意义。

(3. 文章の前後の関係を考え、単語や文章の意味を理解する。文章のキーワードとなる語句の働きを理解しよう。字典、辞書、生活などを活用して、新しい単語を理解しよう。)

4. 能初步把握文章的主要内容，体会文章表达的思想感情。

(4. 文章の主な内容を理解し、文章の言いたいことを理解しよう。)

第三学段（5～6 学年）

4. 联系上下文和自己的积累，推想课文中有关词句的内涵，体会其表达效果。

(4. 文章の前後と自分の経験とを結びつけて、テキストの語句の内在の意味を推測し、その表現効果を理解しよう。)

5. 在阅读中揣摩文章的表达顺序，体会作者的思想感情，初步领悟文章基本的表达方法。

在交流和讨论中，敢于提出自己的看法，作出自己的判断。

(5. 読ながら文章の述べる順序を考え、筆者の意図を理解し、文章の基本的な表現方法を理解しよう。交流と討論の中で、自分の意見を言い、自分なりの判断をすることができる。)

6. 阅读说明性文章，能抓住要点，了解文章的基本说明方法。

(6. 説明的文章を読み、重点をつかみ、文章の基本的な説明方法を理解しよう。)

(語文課程標準研制組「語文課程標準」。引用は、人民教育出版社ホームページ <http://www.pep.com.cn/xiaoyu/jiaoshi/tbjx/kbjd/jiedu/> (2011 年 12 月 20 日アクセス) による。)

以上は、「課程標準」における、説明的文章指導と関係する項目である。低学年では、生活と結びつけて文章を理解すること、中学年では、語や文を理解し、キーワードとなる語や文について考え、文章の内容と言いたいことを理解すること、高学年では、隠されている意味を推測し、述べる順序を考え、筆者の意図を理解し、自分の意見・判断を持ちながら読むことを示している。

これはあくまでも自らの経験によるものであるが、今までの中国における説明的文章指導は、テキストに書かれている内容ばかりを重視してきたように思われる。しかし、上記の目標には、文章の述べ方や筆者の意図に目を向けさせようとしていることが明確に示されている。

第2項 教科書教材から見た説明的文章指導の目的

ここでは、前項で考察した「課程標準」における説明的文章指導の目的に応じて、中国の教科書会社が、どのような教材を取り上げてそれらの力を育てようとしているかについて考える。

教科書には、「課程標準」の要求が反映されていると考えられる。その要求をふまえながら、出版社は何をねらい教科書を作成しているのだろうか。前にも述べたように、中国における低学年の教材は、日本のようにジャンル分けが明示されていない。しかし、実は教材の中に、日本の説明的文章と同じような働きを持つ教材が多くある。これらの教材について、説明的文章と関係のあるところを取り出して、教科書会社が子どもたちに何を教えようとしているかを考察する。

本研究では、中国で最も多く使われている人民教育出版社発行の語文教科書を取り上げる。以下に引用するのは、『義務教育課程標準実験教科書 語文』（課程教材研究所小学語文課程教材研究開発中心編 1年上～2年上（2001年初審通過）、2年下～3年下（2002年初審通過）、4年上～5年上（2003年初審通過）、5年下～6年下（2004年初審通過））に載っている教材中の文章である。なお、この教科書は各学年上下の2冊があり、6年間で計12冊が用いられる。引用の後の括弧内は日本語訳である。

1年下

「第一部分」

夏天就要到了。夏天里，会发生哪些有趣的事呢？我们一起去看看吧。（P. 57）

（もうすぐ夏になります。夏に何か面白そうなことはありませんか。みんなで一緒に探しに行きましょう。）

「第八部分」

我们身边处处有科学，让我们一起去探索，去发现。（P. 134）

(私たちの身のまわりに、あちこちに科学知識が存在します。みんなで一緒に探して、発見してみましょう。)

3 年上

「第四組」

你是否留意过鲜花的开放？你是否观察过星星的闪烁？你是否注意过蜜蜂的飞行？我们身边的许多事物，都有着无穷的奥妙。让我们认真阅读本组课文，一起去了解作者发现的秘密。我们还要留心观察，看谁有更多地发现。(P. 51)

(あなたは、花が咲くときの様子を観察したことがありますか。キラキラしている星を観察したことがありますか。ハチが飛んでいるときに注意して見たことがありますか。私たちの身のまわりのいろいろな物事は、たくさんの秘密を持っています。みなさん、この単元の教材を読んで、一緒に、筆者が発見した秘密を理解しましょう。さらによく観察して、もっとたくさんの発見ができるのは誰でしょう。)

4 年上

「第四組」

动物是我们人类的朋友。古今中外，许多作家妙笔生花，为它们写下了一篇篇生动的文章。本组的课文，有的是不同作家写的相同的动物。有的是同一作家写的不同的动物。我们来认真读一读，具体感受作家笔下栩栩如生的动物形象，还可以试着比较一下课文在表达上的不同。(P. 62)

(動物は私たち人類の友達です。昔から今まで中国でも外国でも、いろいろな筆者によって、動物が登場する数多くの傑作が書かれています。この單元には、違う筆者が書いた、同じ動物が出てくる文章が載っています。同じ筆者が書いた、違う動物が登場する文章も載っています。よく読んで、筆者が書いた生き生きとした動物の様子を感じ取りましょう。表現方法の違いを比較してみましょう。)

5 年上

「第三組」

在生活中，我们常常会读到说明性文章。这些文章，不论是讲清楚植物植物的形态特征，还是说明白动物的生活习性，不论是介绍新产品的使用方法，还是解释自然现象的形成原因，都要使用一些说明的方法。

学习本组的说明性文章，要抓住课文的要点，了解基本的说明方法，并试着加以运用。
(P. 39)

(生活の中で、私たちはよく説明的文章を読みます。これらの文章には、植物の様子や特徴をわかりやすく説明するもの、動物の生活習慣を説明するもの、新製品の使用方法を説明するもの、自然現象が生成する原因について書かれているものもあり

ます。それらの文章は、ある説明方法を使って、書かれています。

この単元の説明的文章を勉強して、教材の要点を把握し、基本的な説明方法を理解することができ、ある程度に使えるようになります。)

6 年下

「第二組」

泱泱华夏，盛开着五十六朵民族之花。不同的地区，不同的民族，都有着自己独具特色的民风民俗。不一样的节日，不一样的穿着，不一样的食物，不一样的民居……生活中的点点滴滴，无不体现出丰富多彩的地域特色，无不展示着民族文化的独特魅力。让我们跟随作者的笔触，去感受那一幅幅绚丽多姿的民俗风情画吧！

学习本组课文，了解课文表现出来的不同地区，不同民族的民风民俗，体会作者是怎样写出民俗特点的。还可以结合课文的学习，就自己感兴趣的某个方面，如，节日、服饰、饮食、民居，运用以前学到的方法，开展调查活动，了解自己身边的民风民俗。(P. 23)

(広い中華では、56 の民族の花が咲いています。違う地域、違う民族、それぞれ独自の民族の風習を持っています。祝日が違い、服装が違い、食べ物が違い、住まいが違い……生活の中のさまざまな細かいことが、その多様な地域の特徴を表しています。民族の魅力もあらわれています。作者が書かれた内容を読んで、その美しい民族の絵を感じましょう。)

この単元の教材を勉強して、テキストに書かれている違う地域、違う風習を理解し、作者の表現方法をとらえましょう。教材を学ぶと同時に、自分の関心があるところ、例えば、祝日、服装、飲食、住まいなどについて、以前に勉強した方法で、調査活動を行って、自分の身のまわりの民族風習を理解しましょう。)

上に引用した文章の内容と、「課程標準」に明記されている内容とを対照しながら、考察してみる。まず、1年生の教材では、「課程標準」の第一学段(1・2年生)における「実生活と結びつけてテキストを理解しよう。」の項目をふまえて、教科書の中で、そして生活の中で、興味関心を持つ物事について観察し、その中で新しいことを発見することが求められている。次に、3年生の教材では、低学年のように何の情報でも収集するのではなく、文章の内容に応じて情報を収集するように変化している。このことは、「課程標準」の第二段階(3・4年生)の「文章のキーワードとなる語句の働きを理解しよう。」の項目と関連しているのではないだろうか。さらに、4年生の教材のように様々な文章を読ませることは、同じく「課程標準」の第2学段(3・4年生)の「文章の主な内容を理解し、文章の言いたいことを理解しよう。」にもかかわると考えられる。また、4年生の教材では、筆者や述べ方に着目させているが、これは、「課程標準」の第3学段にある「筆者の意図を理解し、文章の基本的な表現方法を理解しよう。」の項目を先取りした比較読みの要求として位置づけられる。なお、5年生や6年生の教材では、この項目をふまえて明確に文章の述べ

方に注目することが書かれている。また、6年生の教材での調査活動は、述べ方について学んだ成果を活用するものともいえるし、「課程標準」の第三学段（5・6年生）の「交流与討論の中で、自分の意見を言い、自分なりの判断をすることができる。」に結びつくものであるともいえるだろう。

以上のような記述からは、この教科書が、低学年では実生活との関連を意識しており、そこから中学年・高学年と進むに従って、文章の方に焦点化させたり、比較読みなどをさせながら、筆者やその表現方法にも着目させたりしていることがわかる。子どもの実生活と関連させる、文章を理解させる、筆者とその表現方法を理解させることが、学年の進行に即して求められているところに、中国の教科書における説明的文章指導の目的があるといえるだろう。

第3節 説明的文章指導の目的における日中の共通点と相違点

第1項 説明的文章指導の目的について

説明的文章指導の目的について、日中両国ともに、子どもたちに新しい知識を与えようとしているねらいは共通している。新しい知識を理解するためには、書かれている内容を正確に読み取ることが必要である。そのために両国とも、小学校の6年間で低学年・中学年・高学年の三つの段階に分けて、指導の目的を明確にしている。ここでのねらいは、両国共通であるといえるだろう。

ただし、前も述べたように、説明的文章の学習では新しい情報を得て知識を獲得すること以外にも大事なことがある。「どうすれば相手に自分の言いたいことをうまく伝えられるだろう」と悩み、言い方を工夫しようとした経験のある人は、説明的文章の筆者でなくてもいるだろう。説明的文章の筆者は、読者に自分の言葉をよく理解してもらうために、書き方を工夫している。だからこそ、説明的文章の学習で、筆者の書き方に着目して、自分の生活の中でそれを活用することを求めるのは重要なことである。

文章の書き方という点について述べるならば、日本では、低学年から、内容だけではなく、述べ方にも注目させることも可能だろう。「学習指導要領」でも、低学年では、「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」とあり、「時間的な順序や事柄の順序」という書き方に目を向けさせることもできるだろう。一方、中国の低学年では、生活と結びつけて文章を理解し、たくさんの知識を身に付けることを求めている。中国の説明的文章の学習で初めて書き方に着目させることができるのは、中学年（4年生）以降なのではないか。高学年に入って、やっと明確に述べる順序を考えることが要求されるようになっていく。このように考えると、書き方への着目という点においては、日本の方が先行して指導する機会を得やすいと考えられる。

第2項 小学校低学年の位置づけについて

様々なことに興味・関心を抱くであろう低学年の子どもたちに対して、その興味・関心

を高めるためには、幅広い教材内容と多様な授業のあり方が望まれる。教師が豊かな学習環境を作ると、子どもたちは喜んで学びに向かうと考えられる。逆に、子どもに合わない学習環境であれば、子どもたちは学びから逃避する恐れもある。学校教育における学びの出発点にある低学年の子どもに対する指導は、極めて重要な位置にあると言えるだろう。

低学年の指導の大切さを示す例として、河野順子（2008）の研究がある。小学校低学年の説明的文章の指導について、河野（2008）では次のように述べられている。

低学年の説明的文章の学習指導など通して、子どもたちの内に「世界・論理に関する概念的知識」や「世界・論理を捉える技能」が豊かに育てられていなければならない。

（河野順子（2008）「入門期の説明的文章の授業改革の視点」，河野順子・国語教育湧水の会（『入門期の説明的文章の授業改革』，明治図書，p. 20.）

河野（2008）は、この引用にある「世界・論理に関する概念的知識」を「ある見方・考え方（認識）で世界を切り取ったときの内容とその方法についての知識」として、「世界・論理を捉える技能」を「どのような見方・考え方で世界を切り取り、それをいかに効果的に表現していくかということに関する技能」として説明している（河野順子（2008）「はじめに」，河野順子・国語教育湧水の会（『入門期の説明的文章の授業改革』，明治図書，p. 7.）。

子どもたちの論理的思考力を鍛える場面は様々にあるだろうが、説明的文章の指導でも、その力を育むことができる。河野（2008）では、小学校の低学年の時期をその指導の大事な時期として位置づけている。たとえば、光村図書出版の1年下の教材に「どうぶつの赤ちゃん」があるが、そこでは「ライオン」と「シマウマ」が対比されている。そしてその対比の観点は、生まれた時の様子と育っていく時の様子であり、目や耳などの着眼点も示されている。そこには自然界とそこに生きる生き物をどうとらえるかという「世界・論理に関する概念的知識」や「世界・論理を捉える技能」が提示されているのである。そうした知識や技能を獲得していく過程の出発点として、低学年における説明的文章指導は重要な位置にある。そこでの教育のあり方は、子どもの将来の成長（たとえば論理的思考力の発達）にも大きな影響を与えることだろう。

低学年の説明的文章指導では、中国は「テキストの前後を考え、実生活と結びつけてテキストを理解」することと、「単語の量を増やしていく」ことが目指されている。一方、日本の場合は、前項で述べたように述べ方に着目する機会を与え、そして論理的思考力を育む場として、低学年の説明的文章指導を位置づけている。ここに、日中両国の説明的文章指導における、小学校低学年の位置づけの違いを見出すことができる。

第2章 小学校の国語科教科書における

説明的文章教材の内容と構成

第1節 日本の説明的文章教材の構成

説明的文章指導に関する考察を具体的に進めるために、第二章では、日本の光村図書出版が発行している国語科教科書と、中国の人民教育出版社が発行している語文教科書を取り上げて、それらに載っている説明的文章教材を比較する。両者を取り上げるのは、ここまでの考察でも述べた通り、両教科書が、それぞれの国において最も多く採択されているからである。ここでは二社の趣旨や特徴を比較して、主に、低学年の特徴と相違点を明らかにしたい。

まず、日本の光村図書出版から出版されている教科書中の説明的文章教材のリストを、以下に改めて示す。

- 1 年上 「なぞなぞあそび」「くちばし」「みいつけた」
- 1 年下 「じどう車くらべ」「どうぶつの赤ちゃん」
- 2 年上 「たんぽぽのちえ」「どうぶつ園のじゅうい」
- 2 年下 「しかけカードの作り方」「おにごっこ」
- 3 年上 「イルカのねむり方」「ありの行列」
- 3 年下 「すがたをかえる大豆」「かるた」
- 4 年上 「大きな力を出す」「動いて、考えて、また動く」
- 4 年下 「アップとルーズで伝える」「ウナギのなぞを追って」
- 5 年 「新聞を読もう」「見立てる」「生き物は円柱形」「天気を予想する」
「千年の釘にいどむ」「ゆるやかにつながるインターネット」
- 6 年 「感情」「生き物はつながりの中に」「平和のとりでを築く」
『鳥獣戯画』を読む」「言葉は動く」

このリストから、教科書に扱っている説明的文章教材の題材は、さまざまな分野の内容から得られていることが分かる。具体的には、自然環境、動植物の生態、遊び・生活・社会・文化にかかわる事物、人間の仕組み、人のあり方、人と人のつながりや人々が接する方法、地理に関する事象、言葉、メディアといったものを挙げることができる。

1年生～6年生までの各教材では、これらの幅広い題材が、学年に合わせて分配されていると考えられる。低学年では、自然環境や具体的な事物に関係するものが多く取り上げられているが、中高学年では、それにとどまらず、扱われている題材も幅広くなる。特に高学年では、筆者が自分の意見を示したり考え方を明らかにしたりする論説文が増えている。子どもにとっても、低学年の段階では、実生活と結びやすい題材の方が読みやすく意欲的に学習できるだろうし、学年があがるにしたがって、子どもの認識する世界も広がるから、題材にも広がりが必要である。高学年では、筆者の考えが示されていると、それに対する自分なりの思いや意見を持ちやすくなると考えられる。こうしたことから、中学年から高学年にかけて、題材が広がったり、説明文から論説文へと発展したりするように、

教材が構成されているのではないか。

光村図書出版の教科書では、教材の冒頭に、子どもへの働きかけが記されている。そこからも、どのように読ませたいかという編集者の意図を読み取ることができると考えられる。以下に、その言葉を引用する。(教材との対応については、第1章・第1節・「第1項 説明的文章指導の目的に関する先行研究の指摘」を参照。)

1年(上) みんなでよもう

1年(下) 比べてよもう／ちがいをかんがえてよもう

2年(上) 読んでわかったことをまとめよう／読んで考えたことを書こう

2年(下) 読んで、せつめいのしかたを考えよう／知っていることとつなげて読もう

3年(上) 読んで、かんそうをもとう

3年(下) せつめいのしかたを考えよう／かるたについて知ろう

4年(上) 読んで、自分の考えをまとめよう

4年(下) 説明のしかたについて考えよう／科学読み物をしょうかいしよう

5年 新聞の編集のしかたや記事の書き方に目を向けよう／筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう／説明のしかたについて考えよう／本は友達／自分の考えを明確にしながら読もう

6年 文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう／ものの見方を広げよう／読んで、自分の考えをもとう／言葉について考えよう

これらは、「学習指導要領」の記述に合わせて示されているが、詳細に見ていくと、「みんなで読もう」という学びへの誘いから始まり、最終的には6年生の「文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう」「ものの見方を広げよう」「読んで、自分の考えをもとう」「言葉について考えよう」といった、読者である子どもの見解を扱う内容へと展開している。その過程で、例えば3年(上)の「読んで、かんそうをもとう」のような、まずは自分の思いを抱くことも求められている。また、内容だけでなく、4年(下)の「説明のしかたについて考えよう」のように、書き方に着目することを明らかに要求している教材もある。このように、題材の広がりだけでなく、説明文から論説文への移行に合わせて、読み方も広げていけるように、教材は構成されている。

第2節 中国の説明的文章教材の構成

前にも述べたように、中国の教科書では、低学年でのジャンル分けがない。しかし、日本の説明的文章と同じ働きを持つ教材は数多く存在している。中国で最も多く使われている中国人民教育出版社の教科書に載っている、日本の説明的文章に該当する教材は以下の通りである。題名の後の括弧内は、題名の日本語訳である。

1年上

・「影子」(「影」)

“影”と“人”は切り離されることがないという特徴を紹介している。“影”に関する現象を理解させようとしている。

・「比尾巴」(「しっぽ比べ」)

子どもたちが身近に感じる動物を題材とする教材である。クイズの形で6種類の動物のしっぽの特徴を紹介し、それを通して、さまざまな動物のしっぽの特徴を理解させようとしている。

・「一次比一次有进步」(「進展があるたびに」)

童話のような表現によって、野菜の特徴を紹介している。ツバメのお母さんは子どもを野菜畑に行かせ、野菜の違いを観察させる。行き来を3回繰り返したところ、やっと「とうがん」と「なす」との違いに気づいたと書かれている。物事の特徴を理解しようとするとき、よく観察することが必要であることを伝えている。

・「小松鼠找花生」(「リスは落花生を探す」)

童話のような表現によって、大人にとって当然なことを、子どもたちに伝えている。リスが大きな木のそばに落花生の種を播いた。リスは、実ができれば収穫して冬に食べようと思っている。しかし、待っても待っても、花は全部散ったにもかかわらず実は一個もできない。リスはおかしいと思い、誰かが取っていったのかと考える。このような話を通して、子どもたちに落花生の実が土の中にあることを教える。子どもたちが、落花生の実が土の中にあるという特徴を知り、植物を観察することについて関心を高めることをねらっている。

・「雪地里的小画家」(「雪地の中の画家」)

白い紙のような一面の雪の上をニワトリ、犬、カモ、馬が歩いていた後、その雪の上にそれぞれの足跡が残っている。さまざまな足跡があってもカエルの足跡はない。カエルは冬眠しているからである。ニワトリ、犬、カモ、馬の足の形の違い、そして、カエルのように、生き物には冬眠するものがあることを理解させようとしている。

1年下

・「要下雨了」(「もうすぐ雨だよ」)

童話のような表現で、日常生活の中の気象情報に関する常識が書かれている。ツバメが低く飛ぶ、魚が水面近くで泳ぐ、アリが引っ越しするなどの現象と雨降りとの関係を理解させようとしている。

・「小壁虎借尾巴」(「ヤモリのしっぽ借り」)

ヤモリの子どもが蛇にかまれ、しっぽがなくなった。見た目が悪いので、魚、牛、ツバメにしっぽを借りようとしたが、誰も貸してくれなかった。ヤモリのお母さんは、新しいしっぽが伸びてきたことを子どものヤモリに気付かせる。動物のしっぽの特徴やその役割についての理解を求めている。

・「棉花姑娘」(「ワタの娘」)

ワタの娘が病気になった。ツバメは空中にいる害虫を取れる。キツツキは木の中の害虫を取れる。カエルは畑の中の害虫を取れる。しかし、だれもワタの娘の害虫を取ることができない。そのとき、テントウムシがやってきて、ワタの娘についていた全部の害虫を取った。ワタの娘は元気になって、成長し、真っ白い綿毛ができた。この教材では、人間に役を立つ鳥類とよい益虫について理解させようとしている。

・「地球爷爷的手」(「地球おじいさんの手」)

かしこいサルは地球の引力を知っている。木の上で桃が落ちてくるのを待って、落ちてきた桃を取ることとしている。引力などの科学知識について、最初の関心を持たせる教材である。

・「兰兰过桥」(「らんらんちゃん橋渡る」)

橋は人々によく知られていて、利用されている。らんらんちゃんのおじいさんは建築士である。らんらんちゃんはおじいさんと一緒に、特殊な橋が発見する。この教材では、水の中に作られた潜水橋と、いつでもどこでも簡単に便利に使える空気入り橋が紹介されていて、その特徴が示されている。

・「火车的故事」(「汽車の物語」)

人間が汽車を発明してから100年あまりが経った。この教材では、蒸気汽車、内燃汽車、電車、リニアモーターが紹介されている。紹介された何種類かの汽車の特徴を理解し、鉄道作りやスピードアップといった科学の発展とともに、大きな進化がもたらされていることがわかる教材である。

・「小蝌蚪找妈妈」(「オタマジャクシはお母さんを探す」)

お母さんを探しているオタマジャクシたちは、自分たちの変化までは気づいてなかった。カエルになって、お母さんと一緒に害虫を取ることができる。オタマジャクシからカエルになる知識が紹介されていて、科学童話に対する興味関心を高めることも意図されている。

2年上

・「植物妈妈有办法」(「植物のお母さんには方法がある」)

植物には種を広げる様々な方法があることを紹介している。植物について興味・関心を持って観察することを促している。

・「我是什么」(「わたしは何ですか」)

擬人法を使って水を紹介している。日常生活でよく使われる水を取り上げて、水と雲、雨、雪の関係について紹介している。人間は、よいところもあれば悪いところもある水を、うまく使えるように努力している。雲、雨、あられ、雪など、これらすべての自然現象の元は水であることを理解させようとしている。

・「回声」(「こだま」)

子どものときの経験から、だれもが、空き部屋や山で大きな声を出して叫んだら「こだま」が帰ってくることを知っている。主人公のカエルくんは、「こだま」のことを、もう一匹のカエルが自分の話を真似しているのかと勘違いした。カエルくんのお母さんが、石を水に投げて、こだまの原理を教えた。こだまの原理をここではじめて教え、科学にも興味を持たせることが意図されている。

・「太空生活趣事多」(「宇宙生活にはおもしろいことがいっぱい」)

宇宙生活では、宇宙船の中は重力がないので物が浮かんでいる、コップをひっくり返しても水がこぼれないなど、奇妙なことがたくさんある。宇宙とそこでの生活の常識を示して、科学に対する関心を高めようとしている。

・「活化石」(「生きた化石」)

博物館の中に展示されている化石を通して、遠い昔の動植物を見られる。それ以外に、銀杏やパンダなどの今も生きている動植物も、私たちに昔の様子を教えてくれる。古代生物の知識を与え、希有な動物を保護する意識を育てようとしている。

2年下

・「充气雨衣」(「エアレインコート」)

リンちゃんは普段の生活でよく観察している。日常生活の中で困ったことがあったら、解決方法を考える。スカートと救命浮環からアイデアを浮かばせ、新しいエアレインコートを作り出したことが紹介されている。日常生活の中で、改善が必要なものを探す意識を育むことが意図されている。

・「雷雨」（「雷雨」）

雷雨が降る前、降っているとき、降った後の自然現象を紹介している。気象情報について観察しよう、観察日記を書こうといったことが求められている。

・「最大の“書”」（「最も大きな本」）

地質を探究している人々にとって、岩は大きな本のようなものだ。その上に、雨が残った足跡、波が走った足跡がある。葉や貝などもある。歴史の変遷、大陸の動き、そのすべては、この最も大きな本の上に書かれている。自然に対して興味を持って探究することが促されている。

・「要是你在野外迷了路」（「もしも郊外で迷ったら」）

詩の形式で、四種類の天然の羅針盤が紹介されている。①太陽の位置、②北極星の位置、③木の葉、④雪の積み方、である。方向方角の分け方を把握することに加えて、身近な物事を観察し発明することが期待されている。

・「歌德的梦」（「ゲーテの夢」）

ゲーテは、夢でいろいろな便利なことを見た。宇宙船で火星へ旅行に行ける、月の上に住める、買い物は家から出ずに済む、地球上でも月の上の商品の予約ができるなどである。教材では、科学夢の意識を持とう、と促されている。

・「恐龙的灭绝」（「恐竜の絶滅」）

恐竜はなぜ絶滅したのか、いくつかの理由が説明されている。しかし、そのそれらの理由は、いずれも証拠が不十分である。みんなが努力したら、近い未来にこの問題が解決できる可能性がある。恐竜の絶滅などの自然界での現象に対して、興味を持って探究することの意義が感じられる教材である。

3年上

・「花钟」（「花時計」）

一日の中で、9種類の花が違う時間に咲くことを紹介している。また、そうなった原因が湿度、温度、昆虫の活動時間などと関係していることがされている。

・「蜜蜂」(「蜂」)

フランスの生物学者による、蜂が方向を判断する能力を持つことを証明する実験である。生物学者は、蜂 20 匹を 1 キロ離れたところから放ち、娘に巣箱の近くで待っていてもらって、蜂が帰ってこられるかどうかを確認した。この実験の結果、17 匹が巣箱に帰ってきた。理由ははっきり説明されていないが、蜂には方向がわかることについては間違いないようである。

3 年下

・「太陽」(「太陽」)

数字を挙げ、比喩などの方法を使って説明している文章である。文章は、太陽の特徴、地球からの遠さ、大きさ、熱さについて紹介されている叙述と、人類と太陽の親密な関係について述べている叙述の二つに分けることができる。太陽の特徴を理解することに加えて、説明の方法を教えることも目指されている。

・「月球之迷」(「月のなぞ」)

月の美しさ、月の寂しさ、月の秘密と魅力を紹介している文章である。子どもたちに、科学の秘密に関心を持たせようとしている。

・「我家跨上了“信息高速路”」(「我が家は情報ハイウェイ」)

お父さんからインターネットの役割を聞き、お母さんからインターネットの使い方を教えてもらって、子どもがはじめてインターネットを経験したことが書かれている。インターネットのことを子どもたちに伝え、現代の科学技術に関心を持たせようとしている。

・「果园机器人」(「果樹園のロボット」)

果樹園で働いているいろいろなロボットの様子が書かれている。ロボットは、木から果物の実を取ったり、箱に詰めたり、指定された場所に運んだりする。そのロボットたちは落ちた果物を使って発電する。ロボットの世界と科学技術について関心を持たせることが意図されている教材である。

4 年上

・「白鵝」(「白いガチョウ」)

ガチョウの特徴を紹介している。ガチョウの鳴き声、餌の食べ方、歩き方などについて書かれている。

・「白公鵝」(「白いオスガチョウ」)

筆者が釣り場で会った一匹のオスガチョウについて、その歩く様子、泳ぐ様子、餌を盗

んで食べる様子を紹介している。

- ・「猫」(「猫」)

猫の気まぐれな性格について書かれた教材である。

- ・「母鸡」(「めんどり」)

めんどりの性格は悪い。しかし、自分の子どもを守り、餌の取り方などを教え、母親として立派なものであることを述べている教材である。

- ・「长城」(「長城」)

万里の長城を紹介した教材である。

- ・「爬山虎的脚」(「ツタの足」)

ツタの生きる場所、葉の様子、足の形の特徴を紹介している。どうやって壁に伸びていくかも示されている。教材には「よく観察する習慣を身に付けよう」「観察したことを具体的に、順序に従って書くことを知ろう」とある。

- ・「蟋蟀的住宅」(「コオロギの住宅」)

フランスの昆虫科学者の観察日記である。彼は、観察したコオロギの住処の特徴・機能を紹介している。筆者のように身近な物事をよく観察し、豊かなユーモアのある表現方法を学ばせようとしている。

- ・「呼风唤雨新世纪」(「大きな力を持つ新しい時代」)

科学技術は人間の社会に大きな変化を与える。夢のようなことも、いつかは実現できるはずである。子どもに、20 世紀の科学技術が人類に大きな変化をもたらしたことを理解させ、科学に対する関心を高めることを求める教材である。説明の方法を学ばせることも意図されている。

- ・「电脑住宅」(「コンピュータ住宅」)

完全なコンピュータシステムでコントロールされた住宅を紹介している。教材には、「新しい知識を知って、科学への関心を高めよう」「順序に従った説明方法を理解しよう」と記されている。

- ・「向蓝天的恐龙」(「青空に向かう恐竜」)

科学者の研究によって、鳥類は恐竜の末裔である可能性が高いと推測している。教材で使われている適切な表現方法の理解が求められている。

・「飞船上的特殊乘客」(「航空船の特別な乗客」)

植物の種が一回宇宙船に載って空中に行き、帰ってきたら、大きな変化が生じている。なす種を例に挙げて、変化後のよいところと、変化する二つの原因を述べている。教材には「科学研究と科学実験の不思議さを感じよう」「基本的な説明方法を勉強しよう」と書かれている。

4年下

・「自然之道」(「自然の原則」)

幼いカメが、どうやって巣から海に戻っていくかを説明している。鳥に食べられそうになった一匹のカメを助けたところ、それは大きな間違いで、そのことが合図となって何匹かのカメが襲われることになった。自然に反すると望むことと違う結果になる可能性があることを教えている。

・「黄河是怎样变化」(「黄河はどう変化したか」)

黄河の変化とその原因、及びそれへの対策が説明されている。教材には「黄河の変化の原因を理解しよう」と書かれていて、黄河に対する理解を深めることが目指されている。

・「大自然的启示」(「大自然の啓示」)

次の二つの短編の科学的な説明的文章が載っていて、両教材のそれぞれの内容を理解することを求めている。

「“打扫”森林」(「森林を掃除する」)

ドイツにある官吏がいた。その人物は着任したら、まず森林の灌木や雑草などをきれいに掃除した。その行動は生態のバランスを崩し、森林がだんだんなくなってしまったことを紹介した文章である。

「人类的老师」(「人類の先生」)

人間は、トンボやクジラなどの動物からいろいろなアイディアをもらって、様々な物を発明できた事を紹介している。

・「蝙蝠和雷达」(「コウモリとレーダー」)

コウモリは夜でも飛べることから、飛行機のレーダーが発明され、夜も安全に飛べるようになったことが説明されている。教材には「内容を理解しよう」「科学的説明的文章に興味を持とう」とある。

5年上

・「鲸」(「くじら」)

くじらの特徴、進化、種類、生活習慣などが説明されている。教材には「くじらの知識を理解しよう」「海洋動物に興味を持とう」とあるが、合わせて、「説明方法を勉強しよう」として、書き方にも目を向けさせている。

・「松鼠」(「リス」)

リスの外見、活動(活動の範囲と時間)、性格、生活習慣が説明されている。教材には「動物に対する愛情を持とう」「リスのかわいいところと生活習慣を理解しよう」とあるが、それに合わせて、『くじら』との述べ方の違いを考えよう」として、前教材との、書き方に着目した比較も求められている。

・「新型玻璃」(「新型ガラス」)

科学発展につれて、いろいろな特別な機能を持つガラスが発明された。この教材では、五種類のガラスを取りあげて説明している。5種類のガラスから科学の進化の速さを気づかせることが求められているが、合わせて、説明方法の学習も促されている。

・「假如没有灰尘」(「もしもほこりがなくなったら」)

人々は、ほこりに対して悪い印象を持っている。しかし、もしもほこりがなかったら、人間に大きな悪い影響がある。ほこりの特徴と役割を理解させるとともに、物事には両面性があり、それを適切にとらえることの大切さを教える教材である。この教材でも、説明方法の学習が促されている。

6年上

・「只有一个地球」(「地球はただ一つしかない」)

私たちが生活している地球に関する知識を説明している。小さい地球にはたくさんの資源が隠れている。教材には「地球に関する知識を理解しよう」「資源を節約し、地球を守ろう」とあるが、合わせて「説明方法を理解しよう」とも記されている。

・「这片土地是神圣的」(「この土地は神聖なもの」)

この教材はインドの著名人による演説である。人類と河、空気、植物などの関係が説明されている。

・「蒙娜丽莎之约」(「モナリザの約束」)

レオナルド・ダビンチの絵「モナリザ」を説明した文章である。

6年下

・「北京的春节」(「北京の春節」)

春節は最も大事な祝日である。場所によって過ごし方が違う。本教材では、北京の春節を説明している。

- ・「藏戏」(「チベットの民族劇曲」)

中国にはたくさんの民族劇曲がある。ここでは、チベット地域で一般に流行している劇曲が取り上げられている。

- ・「各具特色的民居」(「独特な住宅」)

中国の住宅には特別な魅力がある。各民族は状況に合わせ、独自の住宅を作ったことが説明されている。

- ・「和田的维吾尔」(「ウィグルホータン」)

ウィグル民族が集中しているホータンでの生活の様子を説明した教材である。

- ・「真理诞生于一百个问号之后」(「真実は百個の疑問の後に生まれる」)

この教材では、「真実は百個の疑問の後に生まれる」という主張を証明するために、三つの事例を取り上げて説明している。真実を発見する規則に気づかせることが求められているが、合わせて、論説文の書き方の学習も促されている。

上に示した通り、中国人民教育出版社の教科書に載っている説明的文章教材で扱われている題材は、さまざまな分野にわたる。自然環境に関する動植物の生態を題材として書かれているもの、科学発明を題材として書かれているもの、生活に関して身の回りのある事物について書かれているもの、地理に関するものについて書かれているものなどがあり、幅広い。

その中でも、自然環境と生活にかかわるものが多く見られる。特に低学年では、動植物と生活などを題材として、擬人法を使ってクイズや童話のような表現で書かれている教材が多くみられる。低学年でのこのような題材と述べ方は、子どもにとって理解しやすく、彼らの興味・関心を高めることもできると考えられる。中学年では、一つの物事について、筆者がよく観察した上で書かれている文章が見られる。この段階において、内容の理解だけではなく、説明方法についても考えさせようというねらいをとらえることができる。高学年では、人間に関係する内容がたくさん取り上げられていることで、子どもたちに、人々がそれぞれに自分なりの考えを持っていることを理解させ、自らも自分なりの考えを持たせようというねらいを見ることができる。

第3節 説明的文章教材の内容と構成における日中の共通点と相違点

第1項 説明的文章教材の系統性について

まず、第1節で取り上げた光村図書出版の教科書に掲載されている教材を具体的な例として、日本の説明的文章教材の系統性について考察する。

教材の系統性については、様々な観点から考えることができる。例えば認識力（ものの見方）を育てるという点でいえば、低学年の教材では、1年上の「くちばし」などを通して、よく観察したら新しい知識が得られることに気づかせることができるだろう。そして、1年下の「どうぶつの赤ちゃん」などを通して、比較して見ることの大切さに気付かせることができるのではないか。また、2年下の「しかけカードの作り方」「おにごっこ」、3年の「ありの行列」「すがたをかえる大豆」「かるた」によって、教科書だけにとどまらず実生活へと視野を広げて物事をとらえる（認識を広げる）ことの重要性を教えられる。さらに、4年の「アップとルーズで伝える」を通して、ものの見方そのものを吟味することを促すことができるだろうし、5年生の「生き物はつながりの中に」では多様性ばかりではなく共通性に目を向けることの重要性に気付かせ、自分のものの見方を問い直すことができるだろう。6年生の「生き物はつながりの中に」では、筆者のものの見方をふまえて、自分のものの見方を意見として述べることが求められている。このように、“認識の方法を得る→認識を広げる→認識を吟味する→認識を問い直す→認識を表現する”といった体系性を、説明的文章教材から想定することが可能である。

次に、第二節で取り上げた中国人民教育出版社の教科書に掲載されている教材を具体例として、中国の説明的文章教材の系統性について考えてみる。

低学年の「影子」、「比尾巴」、「植物妈妈有办法」などの教材は、子どもたちにできる限り多くの情報を提供する。生活の中におもしろい未知のことがたくさんあることを気付かせ、興味や関心を持っている、身近なことについて情報をたくさん収集させようというねらいが見られる。中学年では、「太陽」、「白鵝」、「白公鵝」などの教材は、筆者が自分の生活の中でよく観察したことを書いている文章が多い。この段階で筆者の存在に気付かせ、説明の方法に目を向けさせて、人によって考えが違うことを理解させようというねらいがうかがえる。高学年では「鯨」、「松鼠」、「只有一个地球」などの教材があるが、そこでは、説明対象について述べること以外に、筆者の考えの論述が増えている。この段階では、書き方に着目して読むこと、筆者の存在を意識しつつ、筆者の考えと自分の考えを区別して、自分なりの考えをしっかりと持つように求められている。中国の説明的文章教材は、情報の受容からはじまって、その情報を提供した筆者やその提供の仕方（書き方）に目を向けさせ、それを受け取った自らの意見を示させるという系統性を想定できると考えられる。

このような系統性は、実は日本の説明的文章教材の場合でも描くことが可能である。この点から見ると、日中両国の説明的文章の構成には共通性がある。しかしその一方で、相違点もある。教科書の教師用指導書を見ると、日本では一つ一つの教材文にかかる授業時間数が長いことがわかる。中国ではそこまで時間をかけない。これは、インターネット等で流布している指導案を見るとわかることである。中国と比較して、日本の教材は、数は少ないが長い文章が多く、一つの教材で漢字や文法をはじめ、題材に関する知識など、さ

まざまなことを子どもたちに教えようとしている。それに対して中国の教材は、数が多く一つ一つの教材は短い。つまり、いくつもの教材を通して、日本の一つの教材のねらいを達成していると考えられる。例えば、一年上の「比尾巴」で、動物の“しっぽの形”の違いに気付かせる。その上で、一年下の「小壁虎借尾巴」で、“しっぽの役割”の違いに気付かせる。このように、中国では、教材を関連付け、最終的な目標を達するような教材編成となっている。要するに、日本では各教材が個々にねらいを持っている。一方の中国では、関連した複数の教材で一つのねらいを扱えるようになっており、それが中国の説明的文章教材の系統性を形づくる可能性がある。

このことは、それぞれの国における読み方の違いにも結びつくのかもしれない。個々に独立した日本の教材に親しんだ子どもたちは、一つの文章に焦点化する読み方をするかもしれない。一方、多数の教材が示され、それらを関連付けることのできる中国の教材に親しんだ子どもたちは、複数の文章をかかわらせる読み方を身につけやすいのではないだろうか。

第2項 説明的文章教材の系統における低学年の位置づけについて

第1章・第3節・「第2項 説明的文章指導における小学校低学年の位置づけ」において、中国における低学年の説明的文章指導では、「テキストの前後を考え、実生活と結びつけてテキストを理解」することと、「単語の量を増やしていく」ことが目指されていることを確認した。一方、日本の場合は、述べ方に着目する機会を与え、そして論理的思考力を育む場として、低学年の説明的文章指導を位置づけていることを指摘した。

確かに、日本の光村図書出版の教科書では、物の見方や考え方、あるいは書き方といった、内容理解にとどまらないことがらを指導することのできる教材があり、先に述べたように、それらが中学年・高学年にかけて発展するように教材が編成されている。

一方の中国の人民教育出版社の教科書も、「テキストの前後を考え、実生活と結びつけてテキストを理解」することと、「単語の量を増やしていく」ことに合致した教材が掲載されている。中国における説明的文章指導の目的に即した教材編成であると言えるだろう。ただし、「テキストの前後を考え、実生活と結びつけて」とあることから想像できるように、個々の教材だけにとじてしまわないようになっていることも、中国の教材の特徴である。教材間に関連性を見出せるようになっており、そこから中国の教材の系統性を描き出すことができる。このことは、一年上の「比尾巴」と一年下の「小壁虎借尾巴」のように、低学年の教材だけを見ても言えることであり、文章をかかわらせて読むという読み方の導入として低学年は位置づけられていると考えられる。

次章では、日中における低学年の説明的文章教材を取り上げて、両国の説明的文章教材とその指導を具体的に比較する。

第3章 小学校低学年における日中の説明的文章教材

第1節 1年生教材「くちばし」と「比尾巴」の共通点及び相違点

第1項 教材について

先にも述べたように、中国の低学年教材の中では説明的文章という言葉が見当たらない。しかし、教材を読んでみると、説明的文章とは定義はされていないが、日本の説明的文章と同じ働きの教材があることがわかる。要するに、中国では低学年教材をはっきりとはジャンル分けしていないだけなのだ。

ここでは、具体的な考察を行うために、中国の説明的文章教材として、人民出版社発行の教科書にある1年生教材「比尾巴」(「しっぽくらべ」)を取り上げる。中国語は漢字ばかりを用いる言語である。そのために教科書では、どの教材でも漢字を指導するようになっている。特に低学年の授業では、漢字指導に多くの時間が割かれるようだ。「比尾巴」でも漢字が指導される。ただし、教科書の内容は「识字」(「漢字を知る」)と「课文」(「テキスト」)に大別されていて、「比尾巴」は「课文」の中の第10篇に位置づけられている。つまり、この教材は読むための教材なのである。したがって、この教材では漢字を教えること以外にも指導すべき内容がある。その点は日本の説明的文章と同じである。「比尾巴」は、説明的文章教材として扱うことのできる教材であると考えられる。

本論文では、各国の説明的文章教材をそれぞれ個別に見るのではなく、両者を比較することによって、その共通点や相違点を明らかにする。「比尾巴」と比較するのにふさわしいのは、日本の光村図書出版の教科書(一年上)に掲載されている「くちばし」である。「比尾巴」と「くちばし」は、「しっぽ」と「くちばし」の違いはあるものの、動物の体の一部分に着目した文章として、類似した内容の教材である。

以下、「比尾巴」と「くちばし」とを比較しながら考察を進める。

1. 教材本文

①「くちばし」

くちばし

さきがするどくとがったくちばしです。

これは、なんのくちばしでしょう。

これは、きつつきのくちばしです。

きつつきは、とがったくちばしで、きにあなをあけます。

そして、きのなかにいるむしをたべます。

ふとくて、さきがまがったくちばしです。

これは、なんのくちばしでしょう。

これは、おうむのくちばしです。

おうむは、まがつたくちばしのさきで、かたいたねのからをわります。
そして、なかのみをたべます。

ほそくて、ながくのびたくちばしです。
これは、なんのくちばしでしょう。
これは、はちどりのくちばしです。
はちどりは、ほそながいくちばしを、はなのなかにいれます。
そして、はなのみつをすいます。

(光村図書『こくご 一上 かざぐるま』((2010 年検定済), p. 43 - 48。)

②比尾巴 (本文の右にあるのは日本語訳である。)

| 比尾巴 | しっぽくらべ |
|-------------|---------------------|
| 谁的尾巴长？ | だれのしっぽが長いですか？ |
| 谁的尾巴短？ | だれのしっぽが短いですか？ |
| 谁的尾巴好像一把伞？ | だれのしっぽが傘のようですか？ |
| 猴子的尾巴长。 | サルのしっぽが長いです。 |
| 兔子的尾巴短。 | ウサギのしっぽが短いです。 |
| 松树的尾巴好像一把伞。 | リスのしっぽが傘のようです。 |
| 谁的尾巴弯？ | だれのしっぽがまがっていますか？ |
| 谁的尾巴扁？ | だれのしっぽが平べったいですか？ |
| 谁的尾巴最好看？ | だれのしっぽがいちばんきれいですか？ |
| 公鸡的尾巴弯。 | おんどりのしっぽがまがっています。 |
| 鸭子的尾巴扁。 | アヒルのしっぽが平べったいです。 |
| 孔雀的尾巴最好看。 | クジャクのしっぽがいちばんきれいです。 |

(人民教育出版社『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級 上冊』, p. 83-84。)

2. 教材の比較

「くちばし」は、それぞれの鳥のくちばしの説明に5文を用いている。それに対して、「比尾巴」は、それぞれの動物のしっぽを、2句ずつを使って説明しているのみである。中国語は漢字だけで表現されるために、「比尾巴」は簡潔な表現であるような印象がある。実際は対象についての説明の分量が異なっており、それが内容の深さに結びついている。

また、両教材では、取り上げた動物の数が異なる。「くちばし」の方は「きつつき」「おうむ」「はちどり」という3種類の鳥が扱われているが、一方の「比尾巴」は、鳥だけに限定せず、「サル」「ウサギ」「リス」「おんどり」「カモ」「クジャク」という6種類の動物が取り上げられている。

さらに、両教材では内容の深さが異なる。「くちばし」の方は、それぞれの鳥のくちばしの特徴から働きまでを説明している。それに比べて、「比尾巴」は、動物のしっぽの一目瞭然な特徴だけを書いている。「くちばし」は外見と機能を関連づけて述べているが、「比尾巴」は外見のみについて記しており、内容の深さに違いがある。この内容の深さの違いと、上に述べた説明の分量の違いは関連している。

3. 筆者について

両教材の筆者についても着目しておきたい。それぞれの文章を書いた人物を紹介した資料を、以下に引用する。

①「くちばし」の筆者・村田浩一氏

1952年 兵庫県生まれ。日本大学生物資源科学部動物資源科学科教授。専門は野生動物学、野生動物医学。野生動物保全を目的とした広範な研究を行っている。著書に『どうぶつえんにいこう』（監修，文溪堂），『新飼育ハンドブック動物園編』（共著，日本動物園水族館協会），『それゆけどうぶつ』（ぱすてる書房），『動物おもしろ歯の百科』（斗夢書房）など。

（光村図書「小学校国語 目次/作者・筆者プロフィール 1年」

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/syogaku/kokugo/contentslist/1nen/index.html#1nenProf18>（2011年12月10日アクセス）による。）

②「比尾巴」の筆者・程宏明氏

1937年生まれ。ペンネームは何越。出身地は河北省である。中国共産党の一員である。1960年に天津師範大学の中文系から卒業。新聞『金揺籃』の編集長であり、天津市児童文学研究会会長でもある。1991年に中国作家協会に入会した。作品は子ども詩集『聰明的仙鶴』、『好玩的剪貼』、『把我数丢了』、『宝宝歌谣』、『彩色的花瓣』など計20部あまり。発表した歌詞1000首あまり。児童詩、歌詞は100回あまり、省レベル以上の賞を受賞したことがある。作品『比尾巴』、『雪地里的小画家』、『快游吧，小鱼』など、全国小学語文の教材（香港を含む）として、収録されている。

（「中国作家」<http://www.chinawriter.com.cn/zxhy/member/828.shtml>（2011年12月10日アクセス）による。）

日本の科学的説明的文章の筆者は、各分野の専門家である場合が多い。一方、中国の科

学的説明的文章は、各領域の専門家ではない人物（作家）によって書かれていることが多い。より正しい情報を子どもたちに伝えるためには、その分野の専門家に書いてもらう方がよいだろうし、そのような編集者の思いも教科書からはうかがわれる。これに対して中国の教材は、子どもたちに覚えやすいように、作家に執筆してもらうことが多くなったと考えられる。自分の経験を述べるならば、私たちは、よく教科書の内容を暗誦させられた。「たくさんよい文章を覚え、自分が文章を書くときに役に立たせる」といった忠告をたくさん聞いてきた。このような傾向が昔から続いていて、一般的な傾向であると思われる。覚えやすいという点で言えば、内容が浅く分量も短い、作家の記した「比尾巴」の方が望ましい教材であると言えるのではないだろうか。

第2項 教師用指導書における教材の扱われ方の比較について

日本と中国における説明的文章教材の違いと関連して、ここでは、それらの教材の扱われ方を比べてみる。ここでは、各国の教師用指導書に着目して、日本の光村図書の小学一年の「くちばし」と中国人民教育出版社の小学一年の「比尾巴」についての記述を比較してみたい。

① 教材についての記述

・「くちばし」

本教材は、入門期の子どもたちが初めて出会う説明的文章である。題名の「いろいろな」に対応するように、最初に五種類のくちばしの写真を提示し、興味をもたせるように構成を工夫している。

鳥のくちばしの形を見たり、特徴からどんな鳥であるかを知ったりするのではなく、くちばしの働きを説明していることが本教材の特徴である。鳥について知っているかどうかを問わず、だれでも考えることができるので、興味や好奇心をもたせることができる。

教材は、左ページの文と絵で問いかけをし、ページをめくって右ページで答えながら説明するという構成が三回繰り返される。そのため、児童はなぞ解きのように興味をもって読み進めることができる。基本文型を繰り返し読む過程で、文型に慣れ、一年生なりの論理的思考力を養いたい。

写真と文章で構成された本教材での学習を通じて、次のような効果が期待できる。

- ・説明的文章を読んで情報を読み取ることの楽しさを体験する。
- ・画像をよく見て情報を読み取ったり想像を広げたりする力を伸ばす。
- ・説明的文章を読むことに慣れ、内容を理解する力を伸ばす。

説明的文章を読み、物事を新しく知ったり、いろいろな本を読みたくなったりするような雰囲気を作り、読むことの楽しさを見つけられるように配慮したい。

この時期の子どもたちにとって、「鳥」は身近に感じられる動物である。しかし、「鳥」

のくちばしの違いに気づいて子どもがまだ少ないと思う。それぞれのくちばしの形によって、違う餌を食べて、生活をしていることがほとんどの子どもに知られていないと思われる。

(光村図書出版(2005)『小学校国語 学習指導書 一(上) かざぐるま』, 光村図書出版, p. 142.)

・「比尾巴」

在孩子的眼中, 小动物是他们最亲近的朋友。本课用三问三答的形式, 介绍了六种动物尾巴的特点, 同时配了六幅栩栩如生的插图。课文那琅琅上口、简明易懂、极富儿童情趣的语言, 能激起学生朗读的欲望, 还能引起学生观察其他动物尾巴特点的兴趣。

本课的教学重点是识字、写字和朗读。教学难点是读好文中的问句。

(日本語訳)

子どもたちの眼中では、小動物はもっとも親しみのある友達のような存在である。本教材は、挿絵を6つ添えながら、問い3つ、答え3つの形で、6種類の動物のしっぽの特徴を紹介している。教材は、子ども向きの言葉遣いで、読みやすく、内容も分かりやすい。子どもたちの朗読意欲を湧き立たせることができる。さらに、子どもたちの、動物のしっぽの特徴を観察する関心を引くこともできる。

本教材の重点は、漢字の読み書き及び教材を読むことである。本教材の難しいところは、疑問文のイントネーションを正確に読むことである。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心(2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 131.)

② 学習目標についての記述

・「くちばし」

◎写真を手がかりにして書かれていることの大体をつかむ。

◎生き物への関心、形態と生活の関係についての知的興味を通じて、国語学習への興味・関心を高める。

この教材で身につけたい力

◎説明の順序や内容を考えながら読む(読イ)

◎問いかけ・説明の語や文のまとまりを考えながら、声に出して読む。(読エ)

○文の主語・述語のつながり確かめながら読む。(言エ(ア))

(光村図書出版(2005)『小学校国語 学習指導書 一(上) かざぐるま』, 光村図書出版, p. 143.)

・「比尾巴」

1. 认识 12 个生字，会写 3 个字。认识 1 种笔画“ノ”，认识两个偏旁“八”和“鸟”。
2. 正确、流利地朗读课文，背诵课文。读好问话的语气。
3. 了解一些动物尾巴的特点。

(日本語訳)

1. 12 個の漢字が読める、3 つの漢字が書ける。1 つの筆画“ノ”を知る、2 つの偏旁“八”と“鳥”を知る。
2. 正確的に、流暢にテキストを読めて、暗記できること。疑問文もきちんと上手に読める。
3. いろいろな動物のしっぽの特徴を知る。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心 (2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 131。)

③ 授業例についての記述

・「くちばし」

教師用指導書には、A 案と B 案の二種類の提案が載っている。A 案は、絵・写真と文を結び付けながら、くちばしの秘密を見つける案である。B 案は、絵・写真を見たり、教材の本文を読んだりしてクイズを作り、クイズ大会をする案である。A 案も B 案もこの教材に 8 時間をかける案であり、授業の流れも具体的に示されている。

・「比尾巴」

授業の提案が一つだけ載っている。その授業の具体的な流れは以下の通りである。

(一) 猜谜导入新课

1. 今天，我们要进行一场猜谜擂台赛，看看哪位同学猜得又对又快？（教师出谜学生猜，给猜对的同学戴上动物头饰。）

红花头上戴，彩衣不用裁，清晨唱只歌，千门万户开。（公鸡）

脚像小扇子，嘴像小铲子，下水捉鱼虾，不湿小花褂。（鸭子）

耳朵长，尾巴短，只吃菜，不吃饭。（兔子）

脑袋聪明，手脚灵巧，喜欢爬树，最爱吃桃。（猴子）

花冠头上戴，锦袍披身上，尾巴像扇子，展开很漂亮。（孔雀）

小老鼠，真奇怪，降落伞，随身带。（松鼠）

2. 这么多的小动物聚集在一起，谁能猜出它们要干什么？（板书：比尾巴，引导学生认识这三个字。）

(二) 趣味对读，熟读成诵

1. 请大家找一个朋友，你问我答地来读一读课文吧。（同桌或者自由选择伙伴进行一问一答对读，一边读一边做动作。）

2. 分组对读或男女生对读，可一边读一边拍手。

(三) 做“找尾巴”游戏，随机认识生字

1. (出示没有尾巴的小动物图片和它们的尾巴) 瞧，这些贪玩的小动物，玩得把尾巴也掉了，谁能帮帮它们，给它们把尾巴找回来？

2. (在找到一种动物的尾巴后，说说这种动物尾巴的特点，随机出示要学习的生字。) 兔子的尾巴有什么特点？(学习“短”)

(四) 学习新笔画，指导写字

(五) 巩固识字，完成课后练习

(六) 知识拓展

同学们，这些动物的尾巴这么漂亮，谁知道它们的尾巴有什么作用呢？(学生根据课外得到的知识，自由发言。)

老师今天给大家带来一些有关动物尾巴的知识，请小朋友在课后去看一看，读一读。(播放『动物尾巴的妙用』录像或将有关动物尾巴功能的资料贴在知识窗中。)

(日本語訳)

一、クイズの形での導入。

1. 今日、私たちはクイズ大会をして、だれが当てるのが早くて、正しいかを競争しよう。(教師は問題を出して、正解した子どもに動物形の頭飾りを付ける。)

頭に赤い花をつけ、身に華やかな衣装を着け、朝から歌い、多くの家々の扉を開ける。(おんどり)

足は小さい扇子みたい、口は小さいシャベルみたい、水に潜って魚やエビを取り、花柄の上着はぬれない。(カモ)

耳が長くて、しっぽが短くて、野菜だけを食べて、ご飯は少しも食べない。(ウサギ)

頭がよくて、手足が器用で、木登りが好きで、桃を食べることが好きだ。(サル)

頭に花飾りをつけ、身にふとんをかぶり、しっぽは扇子みたい、開くととてもきれい。(クジャク)

子ネズミ、変だね、常にらっかさんを身に付けている。(リス)

2. こんなにたくさんの動物たちが、何のために集まっているか、だれが知っていますか。(板書:「しっぽくらべ」)、この三つの漢字の学習を指導する。)

二、二人一組で読もう。教科書を見なくても言えるまで読もう。

1. みんなで友だちを一人誘って、一人が質問して一人が答える形でテキストを読もう。(隣同士あるいは自由に選んだ友だちと一つの質問に対して一つを答えるように読もう。読みながら動きを付けよう。)

2. グループで分かれて読む、または男女で分かれて読む。読みながら手を叩こう。

三、「しっぽを探す」のゲームをしながら、新しい漢字を覚えよう。

1. (しっぽが付いてない動物の絵とそれらのしっぽを見せ) ほら、これらの遊んでばかりの動物たち、しっぽがなくなった、だれか彼らを手伝って、しっぽを見つけてあげられますか。

2. (一匹の動物のしっぽを見つけたら、その動物のしっぽの特徴を言ってみよう。ついでに学習漢字を出す。) ウサギのしっぽは何の特徴がありますか。(学習漢字「短」)

四、新しい筆画を習い、漢字を書く練習をしよう。

五、漢字をしっかり覚え、教科書の練習問題を完成させよう。

六、知識を広げよう。

すべての動物は、それぞれきれいな形のしっぽを持っている。そのしっぽにはどのような役割がありますか。(自らの生活の中で得た知識を使い自由に発言させる。)

先生は、今日みなさんにたくさんの動物のしっぽと関係する資料を持ってきました。みなさん授業後に見て、読んでみなさい。(『動物のしっぽのすばらしい効き目』のビデオを見せる。または動物のしっぽの役割に関する資料を知識コーナーに掲示する。)

④ 考察

小学校低学年の子どもたちは、それまでの家庭生活や幼稚園、保育園での生活を通して、様々な知識や経験を獲得してきているはずである。特に、情報化社会となった今日は、さまざまなメディアが、子どもたちの情報収集の手段となっている。実物を見たことはないが、テレビや絵本などで見たことがある子も多いだろう。

中国の授業は、一つ一つの教材にかかる授業時間数が短い。その代わりに、授業外の時間の予習や復習などに、とても時間をかける。そのような環境は、子どもたちに大きな影響を与える。授業の中で先生が取り上げた語彙について、子どもたちは、授業以外の時間で、新しい世界をどんどん広げていく。

この二つの教材は、どちらもクイズの形で書かれている。このような述べ方で、子どもたちの興味関心を引きだして、学習意欲を高めようとしているところは、両国の同じ傾向である。ただし、ねらいが同じであったとしても、教材本文の違いによって、違う結果になる可能性も考えられる。

両教材は、まず内容が違う。「くちばし」は鳥のくちばしの外見的特徴とくちばしの働きが書かれている。鳥を見たことがない子はいないだろう。多くの子どもたちは、鳥といったら羽があつて、飛べることを知っている。この教材で、子どもたちは鳥のくちばしの形とその働きを理解させることができる。実生活の中で、鳥を見るときその全体を観察するだけではなく、細かい部分まで観察する。さらに、鳥からさまざまな物事に視野を広げ、よく観察する習慣を身に付けることができると考えられる。それに対して、「比尾巴」はしっぽの特徴しか書かれていない。しっぽの役割にも注目させるためには、授業で教師が意図的に問いかけることになるのだろう。

教材本文を掲示する方法も、日本と中国では大きく違う。「くちばし」は数ページにまたがって書かれている。クイズのような文章で、ページをめくると答えが書いてある。子どもたちに楽しさを与えられる方法である。子どもたちの興味や関心を引き出すための配慮が感じられる。

挿絵や写真の載せ方にも違いがある。「くちばし」には、くちばしの写真と鳥全体の写真が載せている。一方の「比尾巴」は、6種類の動物はすべてそれぞれ全体の絵しか載っていない。「くちばし」では、鳥のくちばしの様子が示されて、子どもたちにその特徴について観察させることができる。次にページをめぐって、鳥の写真があって、鳥全体のイメージを形成することができる。さらに、文章を通して鳥のくちばしの形はその生活とどのようななかかわりがあるかに気づかせ、くちばしの働きを子どもたちに理解させることができる。この教材を通して鳥のくちばしの形という細かいところに目を向けさせることができるが、それを広げていくと、身の回りのさまざまな物について、もっと細かく観察することを求めているのではないか。一方の「比尾巴」は、動物の絵が載っているが、特別にしっぽを強調しているように見えない。絵だけを見ると、しっぽ以外のところにも注目する子どももいるだろう。絵を見ていろいろな特徴に気づかせることができるかもしれないが、それぞれの特徴がそれぞれの働きに結びついていることに気づかせることは難しいと考えられる。もしもそれを求めるのならば、教師が働きかけたり、子どもたちが知識を出しあったりすることで、特徴と働きの関係について気づかせることになるのだろう。このように考えると、「比尾巴」の授業での教師の役割は大変重い。教師用指導書に書かれている通りに授業をしようとしたら、いつも同じような流れとなってしまう。教師がきちんと自分なりの教材解釈ができていないと、よい授業はできない。教師の読み方の違いによって、違う授業が生まれ、子どもたちの学習意欲も異なったものとなる。

「比尾巴」に比べて「くちばし」の内容は詳しく、分かりやすく書かれている。このことから、鳥のくちばしの特徴とその働きを両方を理解してほしいというねらいをとらえられる。一方の「比尾巴」では、教材そのものに書かれているのはしっぽの特徴である。しかし、教師用指導書の授業例の最後（「六、知識を広げよう。」）には、「すべての動物は、それぞれきれいな形のしっぽを持っている。そのしっぽにはどのような役割がありますか。」

「動物のしっぽの役割に関係する資料を知識コーナーに掲示する。」とあり、特徴だけの指摘にとどまるのではなくその「役割」についても考えさせようとしている。目に見える特徴だけを理解させることに終わらないという点で、日本の教材と中国の教材のねらいには共通性がある。ただし、「くちばし」の方は教材に特徴とその働きが書かれているが、「比尾巴」では役割が書かれていないので、教師が意図的に考えさせなければならない。共通するねらいがあるといっても、ここに大きな違いがある。「比尾巴」の場合は、教師の意識によって、役割にも目を向けさせるか特徴の理解だけに終わるかという違いが生じると考えられる。教師用指導書に「役割」について考えさせる指導が示されていたとしても、それをどれだけ行うかは教師によって異なる。「比尾巴」は、教材に書かれていること以上のことを扱おうとする教師の意識が問われる教材であると言えるだろう。

中国の教師用指導書に比べて、日本の教師用指導書は内容が詳しい。そのために、比較的教師によって大きな差が生じることが少ないと考えられる。一方、中国の教師用指導書が求めていることは幅広く、短時間ですべてを扱うことは難しいだろう。教師の教材観や

子どもたちの実態によって、同じ教材でも全く異なる授業となる可能性もある。

第2節 2年生教材「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」の共通点及び相違点

第1項 教材について

小学校2年生の子どもたちは、学校生活に慣れて、さまざまな物事に対する好奇心も高まっていることだろう。だから、この時期に読む説明的文章教材は、子どもたちの興味や関心をかきたてるような題材と表現でないといけな。そのような理由からだろうか、低学年の説明的文章教材には、物語文の要素を加味した書き方が多くみられる。説明対象となっている植物や動物を擬人化したり、様子を描写的に述べたり、また比喩的表現を使ったりという教材もある。

この論文では低学年の説明的文章教材とその指導に焦点を絞って考察を進めており、第1節において1年生の教材とその指導についての比較を行った。それを受けて、本節では、日本の光村図書出版の2年（上）の教科書に載っている「たんぽぽのちえ」と、中国の人民教育出版社の2年（上）の教科書に載っている「植物妈妈有办法」（「植物のお母さんには方法がある」）を取り上げて、両者を比較してみたい。後に本文を掲載するが、どちらも植物の種の保存について述べていて、内容に共通性のある説明的文章である。

1. 教材本文

①「たんぽぽのちえ」

たんぽぽのちえ

春になると、たんぽぽの黄色いきれいな花がさきます。

二、三日たつと、その花はしぼんで、だんだんくろっぽい色にかわって、いけます。そうして、たんぽぽの花のじくは、ぐったりとじめんにたおれてしまいます。

けれども、たんぽぽは、かれてしまったのではありません。花とじくをしずかに休ませて、たねに、たくさんのえいようをおくっているのです。こうして、たんぽぽは、たねをどんどん太らせるのです。

やがて、花はすっかりかれて、そのあとに、白いわた毛ができてきます。

このわた毛の一つ一つは、ひろがると、ちょうどらっかさんのようになります。たんぽぽは、このわか毛についているたねを、ふわふわととばすのです。

このころになると、それまでたおれていた花のじくが、またおき上がります。そうして、せのびをするように、ぐんぐんのびていきます。

なぜ、こんなことをするのでしょうか。それは、せいを高くするほうが、わた毛に風がよくあたって、たねをとおくまでとばすことができるからです。

よく晴れて、風のある日には、わた毛のらっかさんはいっぱいにひらいて、とおく

までとんでいきます。

でも、しめり気の多い日や、雨ふりの日には、わた毛のらっかさんは、すぼんでしまいます。それは、わた毛がしめって、おもくなるとたねをとおくまでとばすことができないからです。

このように、たんぽぽは、いろいろなちえをはたらかせています。そうして、あちらこちらにたねをちらして、あたらしいなかまをふやしていくのです。

(光村図書『こくご 二上 たんぽぽ』((2010年検定済), p.20 - 25。)

②「植物妈妈有办法」(本文の右にあるのは日本語訳である。)

植物妈妈有办法

植物のお母さんには方法がある

孩子如果已经长大，
就得告别妈妈，四海为家。
牛马有脚，鸟有翅膀，
植物要旅行，靠的啥办法？

もしも子どもが大きくなったら、
おかあさんと別れ、世界が家になる。
牛と馬には足があり、鳥には翼がある。
植物は旅に出たいとき、どんな方法を使っているのか？

蒲公英妈妈准备降落伞，
把它送给自己的娃娃。
只要有风轻轻吹过，
孩子们就乘着风纷纷出发。

たんぽぽのお母さんは落下傘を準備して、
それを自分の子どもたちに送った。
風が軽く吹けば、
子どもたちは風に乗ってそれぞれ出発した。

苍耳妈妈有个好办法，
她给孩子穿上带刺的铠甲。
只要挂住动物的皮毛，
孩子们就能去田野、山洼。

おなもみのおかあさんには一ついい方法がある。
彼女は子どもにとげつきのよろいを着せた。
動物の毛皮に引っ掛けると、
子どもたちは野原や谷などに行くことができる。

豌豆妈妈更有办法，
她仍豆荚晒在太阳底下。
啪的一声，豆荚炸开，
孩子们就蹦着跳着离开妈妈。

えんどうのおかあさんには、さらにいい方法がある。
彼女はさやを太陽にあてた。
「パー」と一声、さやが割れて、
子どもたちは跳んで、おかあさんから離れていった。

植物妈妈的办法很多，
不信你就仔细观察。
那里有许许多多的知识，
粗心的小朋友却得不到它。

植物のおかあさんにはたくさんのいい方法がある。
信じられないなら、自分でよく観察してみなさい。
そこにはたくさんの知識がある、しかし、
そそっかしい子どもはそれがわからない。

2. 教材の比較

「たんぽぽのちえ」は、6 ページにわたって、たんぽぽの開花から綿毛を飛ばすところまでの経緯を説明したものである。たんぽぽという 1 つの植物について、その成長に沿って、具体的に説明している。

一方の「植物妈妈有办法」は、教科書では 3 ページが割り当てられている。歌のような表現で、全文が 5 つの段落に分けられている。第一段落では、植物がどうやって種を広げるかという問いかけからはじめる。第二、三、四段落では、擬人法を使って、たんぽぽ、おなもみ、えんどうの種を広げる方法を説明する。この教材では三種類の植物が取り上げられていて、それらの植物について具体的な説明を記すのではなく、簡潔に、たんぽぽは落下傘のように飛び、おなもみは動物の毛に付け、えんどうは日に当てるという方法を使って仲間を増やしていくことが述べられているのみである。最後の第五段落では、子どもの観察意欲を高めようとしている。授業では、植物を観察し、大自然に興味・関心を持つように育てることが子どもに求められるのだろうか。

「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」の共通点について考察する。どちらの教材も、植物があたかも人間であるかのように書かれている。「植物妈妈有办法」の方が擬人法によって書かれていることをとらえやすいが、「たんぽぽのちえ」もまた、題名に「ちえ」とあるように、人間と重ね合わせてたんぽぽを理解させようとする文章である。こうした両教材に共通する目的は、子どもの観察意欲を高めるところにある。「植物妈妈有办法」では、三種類の植物が出てきており、さらに最後の段落では植物を観察することを促していて、子どもはたくさんの植物の特徴を調べる意欲が高めることができる。一方の「たんぽぽのちえ」では、そのような直接的な働きかけはないが、たんぽぽに話題を絞って、ぼんやりと見ているだけでは気づきにくいことを紹介している。このような教材を読むことを通して、子どもたちの、身の回りの物事を観察することに対する関心を高めることができるだろう。

次に、両教材の相違点について述べる。「たんぽぽのちえ」で強調されているのは、たんぽぽ自身の知恵である。仲間を増やしていくのは、たんぽぽ自身の知恵のおかげである。その一方で、「植物妈妈有办法」では、母親の知恵が強調されていて、母親の知恵によって、子どもたちが増えるように印象づけられる内容と表現となっている。

そのほかにも、挿絵にも大きな違いが見られる。「たんぽぽのちえ」は、5 つの挿絵を使っている。たんぽぽの、花のとき、じくが地面に倒れたとき、じくが起き上がる時、落下傘のように飛んだとき、わた毛の全開と閉じているときの挿絵である。これらの挿絵は、子どもたちが教材を理解する際に大きな役割を果たすと考えられる。一方の「植物妈妈有办法」では、挿絵が二つ示されている。一つは、おなもみと、その隣にうさぎの毛にたくさんのおなもみの実が付いている挿絵である。もう一つは、えんどうと太陽の絵である。

たんぽぽの絵は示されていない。たんぽぽは、子どもにとって一番身近な植物だろう。生活環境によっては見たことがない子どもが多いとはいえないが、この教材を読んでたんぽぽを初めて知ったという子どもは少ないと思われる。それと比較して、おなもみとえんどうを見たことがない子どもは多いのではないか。そのために、たんぽぽの絵は省略して、おなもみとえんどうの絵を載せたのかもしれない。ただし、たんぽぽを知っているからといって、たんぽぽが擬人化されて語られているこの文章のたんぽぽの説明から、その様子を具体的に想像することは容易ではないと考えられる。教師が、挿絵の不足をどう補うかが重要である。

3. 筆者について

第1節では「くちばし」と「比尾巴」の筆者を取り上げたが、「植物妈妈有办法」の筆者が不明であることから、ここでは筆者について考察しない。ただし、「たんぽぽのちえ」の筆者は明らかなので、その情報を以下に示す。「くちばし」と同じく「たんぽぽのちえ」も、専門家によって書かれた教材である。

「たんぽぽのちえ」の作者植村利夫氏は、1909年に和歌山県生まれ。理学博士。特にクモについては世界的に有名な学者であり、たんぽぽについても多数の論文を発表している。1988年没。

(光村図書「小学校国語 目次/作者・筆者プロフィール 2年」)

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/syogaku/kokugo/contentslist/2nen/index.html#2nenProf02> (2011年12月11日アクセス) による。)

第2項 教師用指導書における教材の扱われ方の比較について

第1節では「くちばし」と「比尾巴」について教師用指導書の記述を比較したが、それと同様に、「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」についても教師用指導書の内容を比べてみる。

① 教材についての記述

・「たんぽぽのちえ」

たんぽぽは、一部を除いてほぼ全国的に目にすることのできる花である。仮に本物を見たことのない児童でも、写真や絵で、どんな花かは知っているはずである。児童にとっても身近な花が題材になっている点が、この教材の魅力の一つである。

同時に、身近な花であっても、少し観点を変えてみると、未知（なぞ）の要素がある。

この時期の児童は、未知のことに対して強い興味を示す。そして、未知のこと

が解き明かされることに感動する。本単元では、まず説明文によって未知のことが解明・発見できる喜びを実感させたい。そして、それをきっかけに、この後も説明文を自ら進んで読むようになってほしいと願うものである。

(光村図書出版(2005)『小学校国語 学習指導書 二(上) たんぽぽ』, 光村図書出版, p. 48。)

・「植物妈妈有办法」

黄山奇石, 令人叫绝; 植物王国的奇事, 也十分有趣。从植物妈妈的“办法”中, 我们能感到大自然的奇妙。

这篇课文从题目到内容都运用了拟人的手法, 作者把科学知识用韵文的形式生动形象地表现出来, 语言朗朗上口, 是一篇百读不厌的科普作品。我们在备课和上课的时候, 都要多读, 在读中去感悟课文的韵律美, 去体会课文在表达上的精妙, 去了解课文告诉我们的知识。

植物传播种子的方法不仅多, 而且有趣, 就让我们与学生们一起去探究植物王国、探究大自然的奥秘吧。

(日本語訳)

黄山奇石は人をびっくりさせる。植物王国の奇妙なこともとても面白い。植物のお母さんの「方法」から、私たちは大自然の奇妙を感じることができる。

この教材のタイトルでは擬人法が使われている。筆者は、科学知識をリズムに合わせて、韻文の形で生き生きと表現した。言葉づかいは読みやすく、何回読んでも飽きない科学的文章である。私たちは、授業の準備をするときと授業をするとき、何回も繰り返し読まなければならない。読みを通して、教材のリズムの美しさを感じる。教材の表現上の精妙さを実感させる。教材が私たちに教えようとする知識を理解する。

植物が種を広げる方法は、数が多いだけでなく、とても面白い。みんな一緒に植物の王国に行って、その秘密を探ろう。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心(2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 12。)

② 学習目標についての記述

・「たんぽぽのちえ」

◎たんぽぽがどんな知恵を働かせているのかを読み取り、たんぽぽ(種の保存の仕組みの不思議)に興味をもつとともに、順序に沿った書き方を知る。

○身近なたんぽぽを観察し、友達に書いて知らせる。

この単元で身につけたい力

書く力

○家の近くや写真で見たたんぽぽの様子を、「たんぽぽのちえ」の記述とかかわらせて書く。(イ)

読む力

◎時間の順序や理由づけを示す言葉に着目し、様子とわけなどを考えながら読む。(イ)

○語や文のまとまり、内容のまとまりを考えながら声に出して読む。(エ)

言語の力

・文の中における主語と述語との関係に注意する。(エ (ア))

(光村図書出版(2005)『小学校国語 学習指導書 二(上) たんぽぽ』, 光村図書出版, p. 49。)

・「植物妈妈有办法」

1. 认识 12 个生字。会写 10 个字。
2. 正确、流利、有感情地朗读课文。背诵课文。
3. 有观察植物、了解植物知识、探求植物奥妙的兴趣。

(日本語訳)

1. 12 個の漢字を知ること。10 個の漢字を書けること。
2. 正確に、流暢に、感情を込めてテキストを読むこと。テキストを暗誦すること。
3. 植物を観察すること。植物の知識を理解すること。植物の秘密を探究すること。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心(2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 12-13。)

③ 授業例についての記述

・「たんぽぽのちえ」

教師用指導書には、以下のような三つの授業例が載せられている。

授業例①: 「たんぽぽのちえ」に興味をもち、時間的な順序、理由の説明順序などを考えながら読み進めさせる授業案。

授業例②: たんぽぽの様子と知恵を読み取り、たんぽぽクイズを作り紹介する授業案。読む力(クイズを作るために読む)と話す・聞く力(クイズにして伝え合う)をつけることが意図されている。

授業例③: 読み取った内容をもとに、自分で実際に観察したり調べたりしたことをまとめて発表させる授業案。生活科に関連させる授業である。

(光村図書出版(2005)『小学校国語 学習指導書 二(上) たんぽぽ』, 光村図書出版, p. 50-53。)

・「植物妈妈有办法」

教師指導書には一つの授業案しか示されていない。提案されている授業の流れは以下の通りである。なお、(四) 1. にある「資料袋」とは、教師用指導書に載っている資料であ

り、(六)の「実践活動」とは、子どもたちに事前に資料を準備させ、それについて交流する活動、または、授業後に資料を調べる活動のことである。

(一) 谈话导入

(二) 初读识字

(三) 朗读感悟

1. 范读激趣。
2. 学生自由读，初步感知课文大意。
3. 读第一节，启发提问：谁读懂了“四海为家”这个词语？学生结合上下文说说自己的看法。
4. 朗读第二、三、四节，说一说自己最欣赏哪一位“妈妈”的办法，为什么？
5. 小组合作朗读全文，并试着背诵课文。
6. 背诵比赛（小组集体赛与个人赛结合）。

(四) 读读说说

1. 读补充阅读材料（见“资料袋”），再说一说：除了课文中告诉我们的，你还知道哪些植物是怎样传播种子的？
2. 读“读读抄抄”中的词语，照样子试着再说几个这样的词语。

(五) 指导写字，抄写词语

(六) 实践活动

(日本語訳)

(一) 谈话による導入。

(二) 初読・漢字を知る。

(三) 音読して理解する。

1. 範読して読む意欲を高めさせる。
2. 子どもに自由に読ませる、初読でテキストの大体の意味を理解する。
3. 第一段落を読む。発問：誰か“四海为家”の意味が分かりますか？児童は、文章の前後を結びつけて自分の考えを述べる。
4. 第二、三、四段落を読む。自分が一番好きなのは、どの母親の方法ですか？それはなぜ？
5. グループ力で合わせて全文を読む。試しに暗誦してみる。
6. 暗誦試合（グループ対抗戦と個人戦）。

(四) 読んでみて、話してみて。

1. 補助材料を読んで（“資料袋”参考）、話してみる。本文に紹介されている内容以外に、あなたはどのような植物の種を広げる方法を知っていますか。
2. “読んでみて、書いてみて”の中の単語を読んでみる。それを真似して、いくつかの単語を言ってみる。

(五) 漢字を書く、単語を写す指導。

(六) 実践活動。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心(2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 14-15。)

教師用指導書に載っている「資料袋」の記述は、以下の通りである。

資料袋

种子传播的奥秘

蒲公英是多年生草本植物。它的果实像一个个白色的绒球, 当冠毛展开时, 就像一把把降落伞, 随风飘扬, 把种子传播到四面八方。

春天, 柳絮四处飞扬。你知道春天柳絮飞扬的奥秘吗? 抓一团柳絮仔细观察, 会发现里面有些小颗粒, 那就是柳树的种子。柳树就是靠柳絮的飞扬, 把种子传播到四面八方的。凤仙花妈妈的办法跟豌豆妈妈的办法差不多, 凤仙花果实成熟后会炸裂, 凤仙花妈妈用这种办法把种子送到四面八方。

(日本語訳)

資料袋

種を広げる秘密

たんぽぽは多年生のキク科植物です。実は白い綿毛のようで、冠毛を開くと、落下傘のように風に乗って、種を広げていきます。

春、柳の綿毛があちこちに飛んでいます。あなたは春に柳の綿毛が飛んでいる秘密を知っていますか。柳の綿毛を取って、よく観察してみましょう。その中に、小さい粒々を見つけられます。それが柳の種です。柳はこのように綿毛に頼って、種をあちこちに飛ばしています。

ホウセンカのお母さんの方法はエンドウのお母さんの方法と似ています。ホウセンカの実が熟したら割れます。ホウセンカのお母さんはこの方法で種をあちこちに送ります。

(課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心(2001)『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 15。)

④ 考察

「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」は、なぜ教材として載っているのだろう。二つの出版社の意図を考えてみたい。

光村図書の教師用指導書に指摘されているように、身近な物事を違う視点から観察してみたら、きっと新発見ができるだろう。ここにあるように、「たんぽぽのちえ」は、子どもたちに、知っていることの再認識を求められているとも考えられる。再認識の過程で、さらに新たな発見ができるはずだからだ。一方、中国人民教育出版社が「植物妈妈有办法」を載せたねらいは、子どもたちの好奇心を利用して、どんどん新しい知識を収集させようとしていると考えられる。そのために、一種類の植物だけではなく多種類の植物の例が示されている。

「たんぽぽのちえ」の学習目標を見ると、この教材は説明的文章であることが明らかである。それに対して「植物妈妈有办法」は、その学習目標からみて、漢字指導の教材のように見えるかもしれない。しかし、この教材は漢字指導の教材ではなく、「課文」に位置づけられている文章である。中国の低学年では、漢字指導は最も大事な目標であるが、漢字指導以外にも大事なことがある。二つの教材の学習目標を比べてみると、ねらいが違うことがわかる。日本では、もうこの時期から文章の書き方に注目させている。中国では、漢字の習得とともに、情報の読み取りを意識していると考えられる。なお、「植物妈妈有办法」の「資料袋」の文章は、これも一つの説明的文章として見ることができ、ここからも情報を読み取ることができる。しかし、これはあくまでも「補助材料」としての扱いであり、授業内でどのように取り上げられるのかがはっきりしていない。子どもに読ませるのか、教師が読んで内容を紹介するためのものなのかもわからない。

「たんぽぽのちえ」は、たんぽぽの成長について時間的な順序で書かれている。子どもたちは、このような文章を読みその書き方を真似することを経験して、例えば観察日記などを自分で書ける人に育っていくと考えられる。一方「植物妈妈有办法」は、複数の植物についての情報が書かれている。教師用指導書を見ると、擬人法について述べられているのに、学習目標や授業例ではそれについて触れられていない。表現の形は違うが、「たんぽぽのちえ」も「植物妈妈有办法」も、対象について説明するという筆者の行為がある。それに接することを通して、子どもたちはどうすればうまく説明することができるかという方法を学ぶ。だからこそ、筆者の説明の仕方に目を向けさせなければならない。「植物妈妈有办法」でも、書き方（表現の方法）に目を向けさせることが大切である。教師用指導書にはそれが書いてないので、表現方法を扱うかどうかは教師の指導に左右されることになるのだろう。第1章第3節「説明的文章指導の目的における日中の共通点と相違点」で述べたように、中国では表現方法に着目させることを日本ほど早くから求めない。しかし、「植物妈妈有办法」が擬人法を使ったユニークな表現で書かれており、そういった表現に目を向けさせることも、語文の学習においては大切である。「比尾巴」と同様、「植物妈妈有办法」もまた、教師の意識が問われる教材であると言える。

教材には、模範となるべき役割がある。この役割を失ったら、その教材の価値は失われる。さらに言うと、教材はわかりやすくなければならない。ここでの「わかりやすい」という言葉には二つの意味がある。一つは、子どもたちが読んでわかるという意味である。子どもは年齢によって知識が違うのだから、教材はそれをふまえなければならない。もう一つの意味は、教師にとってわかりやすくなければならないという意味である。教師が教材の本当の価値がわからなかったら、子どもたちにそれを伝えることはできない。ある教材を、子どもたちが読んでもわからない、教師が見ても何を教えたらよいかわからないというのは、その教材の価値はないとも言えるだろう。だから、教師も、教材を解釈して、何を教えるべきなのかをはっきりさせないといけない。教師が自分なりの教材解釈ができないと、よい授業はできないはずだ。教師の教材観によって、子どもたちに伝える内容は

当然違うものとなる。教師の教材解釈を助け、充実した教材観をもたらすために、教師用指導書が有効に働くとよい。例えば「植物妈妈有办法」の教師用指導書に、擬人法などの表現の仕方に、この教材が子どもにとっての模範となる点があると書かれていたり、学習目標や授業例に教材の書き方についての内容が盛り込まれていたりすれば、教師の教材解釈や教材観は、より豊かになるのではないだろうか。

結章 研究の成果と今後の課題

第1節 研究の成果

本論文では、日本と中国における説明的文章指導の共通点と相違点を明らかにするという目的を設定し、特に小学校低学年に焦点化して、「小学校における説明的文章指導の目的」（第1章）、「小学校の国語科教科書における説明的文章教材の内容と構成」（第2章）、「小学校低学年における日中の説明的文章教材」（第3章）の章立てに従い考察を行った。

まず第1章では、日本と中国における説明的文章指導の目的を明らかにし、両国を比較した。その結果、両国ともに子どもたちに新しい知識を与えようとしているねらいは共通しているが、教材の表現方法への着目という点においては、日本の方が先行して指導する機会を得やすいことがわかった。特に低学年の説明的文章指導では、中国で実生活と結び付けたテキストの理解や単語の獲得が目指されている一方で、日本の場合は、教材の述べ方に着目する機会を与え、そして論理的思考力を育む場として、低学年の説明的文章指導を位置づけている。

次に第2章では、日本と中国における説明的文章教材の内容と構成について比較した。その結果、両国ともにそれぞれの国の説明的文章指導の目的に合うよう教材が編成されていることがわかり、“情報の受容からはじまり、その情報を提供した筆者やその提供の仕方（書き方）に目を向けさせ、それを受け取った自らの意見を示させる”という系統性が、両国の説明的文章教材の構成における共通点として浮かび上がった。しかしその一方で、日本では各教材が個々にねらいを持っているが、中国では関連した複数の教材で一つのねらいを扱えるようになっていて、それが中国の説明的文章教材の系統性を形づくる可能性があるという相違点も明らかになった。

最後の第3章では、低学年に焦点を絞った具体的な考察として、日本で多く採択されている光村図書出版の教科書の低学年教材と、中国で多く採用されている人民教育出版社の教科書に載っている低学年教材とを比較した。取り上げたのは、日本の1年生教材「くちばし」と中国の1年生教材「比尾巴」、日本の2年生教材「たんぽぽのちえ」と中国の2年生教材「植物妈妈有办法」である。

「比尾巴」と「くちばし」とを比較すると、前者（「比尾巴」）の方が取り上げる対象の幅が広く、内容が浅い。また、後者（「くちばし」）の方が教材本文の提示方法や教材中に示されている挿絵・写真に配慮がある。「比尾巴」の教師用指導書を見ると内容を深めるための指導について書かれているが、それをどれだけ行うかは教師による。「比尾巴」は、教材に書かれていること以上のことを扱おうとする教師の意識が問われる教材である。

「たんぽぽのちえ」と「植物妈妈有办法」とを比較すると、どちらの教材も擬人法によって書かれていて、子どもの観察意欲を高めようとしている。ただし「たんぽぽのちえ」で強調されているのはたんぽぽ自身の知恵であり、「植物妈妈有办法」では母親の知恵が強調されている。また、1年生教材（「比尾巴」と「くちばし」）の場合と同じように、挿絵が教材理解の助けになるのは日本の教材「たんぽぽのちえ」の方である。両教材の扱われ方としては、「たんぽぽのちえ」の場合、教師用指導書において教材の述べ方に着目させる

ことが求められているが、「植物妈妈有办法」にはそれがないために、表現方法に目を向けさせるか否かは、教師の指導によって異なることになる。中国では表現方法に着目させることを日本ほど早くから求めないが、「植物妈妈有办法」が擬人法を使ったユニークな表現で書かれており、そういった表現に目を向けさせることも、語文の学習においては大切である。「比尾巴」と同様、「植物妈妈有办法」もまた、教師の意識が問われる教材であるといえる。

第2節 今後の課題

日本の教科書にも中国の教科書にも、子どもたちが興味・関心を持ちながら読めるたくさんの説明的文章が載っている。

日本では説明的文章指導の研究が進められているが、中国では、このような研究に取り組んでいる人は少ない。しかし実は、中国における今日の説明的文章指導には、いろいろな問題が存在していると考えられる。具体的には、主に以下のような問題である。

① 指導過程がほぼ同じである。

実際の授業では(1)教材を読ませる→(2)内容を理解する→(3)実生活に結びつける(学年があがると(2)と(3)の間に「説明方法に着目する」が入る)といった指導過程が固定化しているようである。六年間、同じような授業を受けたら誰でも飽きるはずだ。固定化された指導過程を打破することが期待される。

② 教材の分析が多い。

「一つの説明的文章をしっかり理解させないと、指導目標を達成したことにならない」と思いこんでいる教師が少なくないようだ。授業では、教師が物語のようなストーリー性のない説明的文章を分解し、概念だけを取り出して箇条書きのような言葉を示す。そのような分析的な授業では、概念的な内容しか子どもの記憶には残らず、科学の面白さ、言葉の魅力、授業の楽しさなどは全部失われる。たとえ知識が身についても、そもそもその知識を活かす関心が奪われてしまうだろう。

③ 内容を広げすぎる。

「説明的文章の役割は、子どもにたくさんの知識を与えることだ」と考えている教師も多いようだ。そのために、説明的文章の授業の時、教師はいろいろな方法を使って扱う領域を拡張し、資料をたくさん調べさせる。例えばインターネットで流布している「比尾巴」の学習指導案では、たくさんの動物の尻尾の絵や写真を集めて、教室がまるで動物園のようになったことが想像されるものもあった。語文の授業では、教材の言葉や表現方法をもっと重視すべきではないだろうか。

上に書いた①～③は、中国の説明的文章指導に対する印象である。本論文では、日中両国の実際の授業を比較して分析したり考察したりすることができなかった。授業を比較して上記の①～③を実証的に考察し、その改善を目指さなければならない。今後の課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた修士論文指導教員の橋本博孝教授と守田庸一准教授に感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた国語教育研究室の皆様に感謝します。

引用文献・参考文献

《論文等》

1. 阿部昇 (2003) 「説明的文章」, 柴田義松・鶴田清司・阿部昇『あたらしい国語科指導法』, 学文社, P. 54-61。
2. 糸井道浩・植山俊宏 (1995) 『国語教育を学ぶ人のために』, 世界思想社, p. 108-116。
3. 植山俊宏 (1990) 「説明的文章の指導」, 大槻和夫編『教職科学講座 17 国語教育学』福村出版, p. 103-130。
4. 植山俊宏 (2001) 「説明・解説」「論説・評論」, 大槻和夫『〈重要用語 300 の基礎知識 3 巻〉国語科重要用語 300 の基礎知識』, p. 141-142。
5. 植山俊宏 (2001) 「説明的文章教材の指導」, 日本国語教育学会編『国語教育辞典』, 朝倉書店, p. 247-248。
6. 大内敏光 (1984) 「説明・解説」, 田近洵一・井上尚美編『新訂 国語教育指導用語辞典』, 教育出版, p. 44-45。
7. 課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心 (2001) 『義務教育課程標準実験教科書 語文 一年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 131-135。
8. 課程教材研究所小学課文課程教材研究開発中心 (2001) 『義務教育課程標準実験教科書 語文 二年級上冊 教師教学用書』, 人民教育出版社, p. 12-15。
9. 河野順子・国語教育湧水の会著 (2008) 『入門期の説明的文章の授業改革』, 明治図書。
10. 櫻本明美 (2001) 「説明文」, 日本国語教育学会編『国語教育辞典』, 朝倉書店, p. 249。
11. 全国国語授業研究会・白石範孝・桂聖 (2009) 『国語授業力シリーズ いま、求められる説明文の授業力』, 東洋館出版社。
12. 全国大学国語教育学会編 (2002) 『国語科教育学研究の成果と展望』, 明治図書。
13. 中国社会科学院語言研究所編 (2005) 『現代漢語詞典』, 商務印書館, P. 1286。

14. 光村図書出版 (2005) 『小学校国語 学習指導書 一 (上) かざぐるま』, 光村図書出版, p. 142-155。
15. 光村図書出版 (2005) 『小学校国語 学習指導書 二 (上) たんぽぽ』, 光村図書出版, p. 47-73。
16. 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』, 東洋館出版社。

《教科書》

17. 光村図書出版発行 小学校国語教科書 (2010 年文部科学省検定済)。各教科書の名称は論文中に記載した。
18. 人民教育出版社発行 小学校語文教科書 (一年上冊～二年上冊: 2001 年初審通過、二年下冊～三年下冊: 2002 年初審通過、四年上冊～五年上冊: 2003 年初審通過、五年下冊～六年下冊: 2004 年初審通過)。各教科書の名称は論文中に記載した。

《ホームページ掲載の情報》

19. 中国作家ホームページ <http://www.chinawriter.com.cn/zxhy/member/828.shtml>
(2011 年 12 月 10 日アクセス)
20. 光村図書ホームページ 編集の趣旨特色
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/material/23skyokasho/pdf/kokugo/editing/al1.pdf> (2011 年 12 月 20 アクセス)
21. 光村図書ホームページ 小学校国語 目次/作者・筆者プロフィール 1 年
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/syogaku/kokugo/contentslist/1nen/index.html#1nenProf18> (2011 年 12 月 10 日アクセス)
22. 光村図書ホームページ 小学校国語 目次/作者・筆者プロフィール 2 年
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/syogaku/kokugo/contentslist/2nen/index.html#2nenProf02> (2011 年 12 月 11 日アクセス)
23. 人民教育出版社ホームページ 語文課程標準研制組 「語文課程標準」
<http://www.pep.com.cn/xiaoyu/jiaoshi/tbjx/kbjd/jiedu/> (2011 年 12 月 20 日アクセス)

資 料

- ・教材「くちばし」／「比尾巴」
- ・教材「たんぽぽのちえ」／「植物妈妈有办法」